

基本計画書

基本計画										
事項	記入欄								備考	
計画の区分	学部の設置									
フリガナ 設置者	ガッコウホウジン スカガクエン 学校法人 須賀学園									
フリガナ 大学の名称	ウツノミヤキョウワダイガク 宇都宮共和国大学 (Utsunomiya Kyowa University)									
大学本部の位置	栃木県宇都宮市大通り1丁目3番18号									
大学の目的	本学は、教育基本法及び学校教育法に則り、建学精神である「人間形成の教育」に基づき、時代の潮流と社会の要請を見極め、常に知識と能力を向上させるとともに大学を地域社会における知的交流の場とし、さらに経済、教育、文化の振興と社会の向上に貢献できる人材を育成することを目的とする。									
新設学部等の目的	将来の地域社会の担い手である子供の健全育成のために、子ども達の生活・教育・福祉・社会経済環境等の課題について研究し、子どもに関わる高度な知識と実践力を備えた人材を育成するために新学部、新学科を設置するものである。									
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年度	所在地		
	子ども生活学部 (Faculty of Child Studies)	年	人	年次人	人		年月 第年次			
	子ども生活学科 (Department of Child Studies)	4	100	—	400	学士(子ども生活学)	平成23年4月 第1年次	栃木県宇都宮市 下荒針町長坂3829		
	計		100	—	400					
同一設置者内における 変更状況 (定員の移行、 名称の変更等)	宇都宮短期大学 人間福祉学科 幼児福祉専攻(廃止)(△70) ※平成23年4月学生募集停止 宇都宮共和国大学 平成23年4月定員の変更予定 シティライフ学部 シティライフ学科 (昼間主コース) [定員減] (△70) (夜間主コース) (廃止) (△30) ; 入学定員200名→100名(△100), 3年次編入学定員20名→0名(△20) [3年次編入学定員は平成23年4月学生募集停止]									
教育課程	新設学部等の名称					卒業要件単位数				
		講義	演習	実験・実習	計					
	子ども生活学部・学科	60科目	60科目	10科目	130科目	124単位				
教員組織の概要	学部等の名称				専任教員等					兼任 教員等
		教授	准教授	講師	助教	計	助手			
	新設分	子ども生活学部 子ども生活学科	8 (6)	5 (4)	5 (3)	— (—)	18 (13)	4 (4)	20 (11)	
		計	8 (6)	5 (4)	5 (3)	— (—)	18 (13)	4 (4)	20 (11)	
	既設分	シティライフ学部 シティライフ学科	11 (11)	3 (4)	8 (8)	— (—)	22 (23)	— (—)	11 (11)	
		計	11 (11)	3 (4)	8 (8)	— (—)	22 (23)	— (—)	11 (11)	
合計		19 (17)	8 (8)	13 (11)	— (—)	40 (36)	4 (4)	31 (22)		
教員以外の職員の概要	職種			専任	兼任	計				
	事務職員			14 (13)	2 (1)	16 (14)				
	技術職員			0 (0)	0 (0)	0 (0)				
	図書館専門職員			0 (0)	3 (3)	3 (3)				
	その他の職員			0 (0)	1 (1)	1 (1)				
	計			14 (13)	6 (5)	20 (18)				

校 地 等	区 分		専用	共用	共用する他の 学校等の専用	計		宇都宮短期大学 と共用		
	校 舎 敷 地		161,824㎡	37,102㎡	—㎡	198,926㎡				
	運 動 場 用 地		17,378㎡	19,897㎡	—㎡	37,275㎡				
	小 計		179,202㎡	56,999㎡	—㎡	236,201㎡				
	そ の 他		12,563㎡	11,761㎡	—㎡	24,324㎡				
	合 計		191,765㎡	68,760㎡	—㎡	260,525㎡				
校 舎			専用	共用	共用する他の 学校等の専用	計		宇都宮短期大学 と共用		
			15,299㎡ (15,299㎡)	13,654㎡ (13,654㎡)	—㎡ (— ㎡)	28,953㎡ (28,953㎡)				
教室等	講義室		演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習室		大学全体(宇都宮 短期大学と共用 を含む)		
	42室		13室	6室	3室 (補助職員 人)	2室 (補助職員 人)				
専 任 教 員 研 究 室			新学部等の名称		室 数		申請学部全体			
			子ども生活学部		18室					
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 [うち外国書] 冊	学術雑誌 [うち外国書] 種	電子ジャーナル [うち外国書]	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	大学全体での 共用分 図書 97,896冊 学術雑誌 215種		
	子ども生活学部	4,528[450] (3,328[250])	42[11] (22[9])	3[0] (2[0])	446 (346)	1,514 (1,414)	56 (46)			
	計	4,528[450] (3,328[250])	42[11] (22[9])	3[0] (2[0])	446 (346)	1,514 (1,414)	56 (46)			
図書館		面積		閲覧座席数		収 納 可 能 冊 数		大学全体 (宇都宮短期大 学との共用を含 む)		
		2,056㎡		242席		152,290冊				
体育館		面積		体育館以外のスポーツ施設の概要						
		3,106㎡		テニスコート (5面)						
経 費 の 見 積 り 及 び 維 持 方 法 の 概 要	経費の 見積り	区 分		開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次
		教員1人当り研究費等			500千円	500千円	500千円	500千円	—千円	—千円
		共同研究費等			1,000千円	1,000千円	1,000千円	1,000千円	—千円	—千円
		図書購入費		5,934千円	2,000千円	2,000千円	2,000千円	2,000千円	—千円	—千円
	設備購入費		170,296千円	4,000千円	2,000千円	2,000千円	2,000千円	—千円	—千円	
	学生1人当り 納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次			
	1,290千円	1,090千円	1,090千円	1,090千円	—千円	—千円				
学生納付金以外の維持方法の概要			学校法人全体予算充当及び補助金により運営							
既 設 大 学 等 の 状 況	大 学 の 名 称	宇都宮共和大学, 宇都宮短期大学								
	学 部 等 の 名 称	修業 年限	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	学位又 は称号	定員 超過率	開設 年度	所 在 地	
		年	人	年次 人	人		倍			
	宇都宮共和大学 シティライフ学部 シティライフ学科	4	200	3年次編入 20	840	学士(経済学)	0.25	平成11 年度	栃木県宇都宮市 大通り1丁目3番18号	
	宇都宮短期大学 人間福祉学科 幼児福祉専攻	2	70	—	140	短期大学士(人間福祉)	1.03	平成15 年度	栃木県宇都宮市 下荒針町長坂3829	
	社会福祉専攻 介護福祉専攻 音楽科	2 2 2	50 80 70	— — —	100 160 140	短期大学士(人間福祉) 短期大学士(人間福祉) 短期大学士(音楽)	0.41 0.39 0.61	平成13 年度 平成13 年度 昭和42 年度	同上 同上 同上	
附属施設の概要	該当なし									

教育課程等の概要

(子ども生活学部子ども生活学科)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
基礎教育科目	基幹科目	子ども生活学概論	1前	2			○			1							
		現代の教養講座Ⅰ(いのち・こころ・からだ)	1前		2		○			1	1	1			兼1	オムニバス 選択必修	
		現代の教養講座Ⅱ(共感・信頼・共生)	1後		2		○			2					兼1	オムニバス 選択必修	
		現代の教養講座Ⅲ(個・集団・社会)	2前		2		○			2					兼1	オムニバス 選択必修	
		現代の教養講座Ⅳ(美・宗教・自然)	2後		2		○				1				兼2	オムニバス 選択必修	
		生活講座Ⅰ(子どもと生活科学・食育)	1前		2		○				1	1	1		兼1	オムニバス 選択必修	
		生活講座Ⅱ(子どもと生活文化)	1後		2		○			1					兼1	オムニバス 選択必修	
		生活講座Ⅲ(子どもの生活と経済・経営)	2前		2		○								兼1	オムニバス 選択必修	
	教養基礎科目	職業と家庭生活の設計	1後	2			○				1				兼1	選択必修	
		子どもの生活史	2前		2		○			2							
		人間とは何か	1前		2		○			1							
		人間と心理	1後		2		○			1							
		コミュニケーションの心理学	2後		2		○					1					
		環境と共生	3後		2		○								兼1		
		子ども文化論	3前		2		○								兼1		
		少子高齢社会と福祉	3後		2		○								兼1		
		日本国憲法	1前		2		○								兼1		
		都市社会学	1前		2		○								兼1		
	教養演習科目	現代日本史	1後		2		○								兼1		
		食品の消費と流通	1後		2		○								兼1		
		生活技術演習Ⅰ	1後		1			○							兼2		
		生活技術演習Ⅱ	2前		1			○							兼2		
		スポーツと健康Ⅰ(講義を含む)	1前		1				○	1	1					オムニバス	
		スポーツと健康Ⅱ(講義を含む)	1後		1				○	1	1					オムニバス	
		オーラルイングリッシュⅠ	1前		1			○		1	1					※実技	
		オーラルイングリッシュⅡ	1後		1			○		1	1					※実技	
		第二外国語Ⅰ(フランス語)	1前		1			○							兼1		
		第二外国語Ⅱ(フランス語)	1後		1			○							兼1		
		第二外国語Ⅲ(中国語)	1前		1			○							兼1		
		第二外国語Ⅳ(中国語)	1後		1			○							兼1		
		第二外国語Ⅴ(韓国語)	1前		1			○							兼1		
		第二外国語Ⅵ(韓国語)	1後		1			○							兼1		
		情報処理入門Ⅰ	1前		1			○							兼1		
		情報処理入門Ⅱ	1後		1			○							兼1		
		小計			4	50	0	20	11	2	7	3	2	0	0	兼16	
		専門教育科目	保育・目的の理解の本	保育原理Ⅰ	1前	2			○			1					
保育原理Ⅱ	1後				2		○			1							
教育原理(小学校との連携を含む)	2前				2		○								兼1		
教職概論(保育者論)	3前				2		○			1							
教育制度	3前				2		○								兼1		
保育・教育の対象の理解	発達心理学			2後	2			○					1				
	発達支援論			3前		2		○			1						
	発達臨床心理学			3後		2		○					1				
	教育心理学			2後		2		○			1						
	小児保健Ⅰ			2前		2		○								兼2	
	小児保健Ⅱ			2後		2		○								兼2	
	小児保健実習			2後		1			○							兼2	
	小児栄養Ⅰ		2前		1			○							兼2		
	小児栄養Ⅱ		2後		1			○							兼1		
	保育・教育の内容・方法の理解		保育内容総論	1後		1			○		1		1				
保育内容 自然・環境			2前		1			○				1					
保育内容 健康			2前		1			○			1						
保育内容 言語			2後		1			○			1				兼1		
保育内容 身体表現			2前		1			○			1						
保育内容 造形表現			2後		1			○			1						
保育内容 音楽表現			2後		1			○			1						
保育内容 人間関係			2前		1			○			1	1					
保育内容基礎演習Ⅰ			1集中		1			○		1	1	1	2				
保育内容基礎演習Ⅱ			2集中		1			○		1	1	1	2				
保育方法論(情報機器及び教材の活用を含む。)			3後		2			○		1					兼1	オムニバス	
幼児教育課程論			3前		2			○				1					
乳児保育概論			2前		2			○			1						
乳児保育演習Ⅰ		2後		1			○			1							
乳児保育演習Ⅱ		3前		1			○			1							
フィールドワークⅠ	1集中		1			○			2	2	2						
フィールドワークⅡ	2集中		1			○			2	2	2						

様式第2号(その3の1)

授 業 科 目 の 概 要			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎 教育 科目	子ども生活学概論	子ども生活学科に学ぶすべての学生が、子どもと子どもの生活に関する学問の概要について知るための講義である。1年時最初にこれから4年間に学ぶ学問の全体像と子どもとのかかわり方の基本を知り、これからの学習への関心と意欲を深めることをねらいとする。 子どもの育つ力と発達、子どもの健康と生活、子どもと父親・母親、家族、子どもの育つ環境としての地域、保育所、幼稚園の役割、子どもの発達を支える保育者の役割、子育て支援、子どもの権利を守る社会のしくみ、などについて総合的に学ぶ。子どもの発達を支え、子どもが健康で幸せに生きられる社会の仕組みについて理解し、子育て支援、親の子育て支援を実践できる保育者の視点を身につける。	
	現代の教養講座Ⅰ (いのち・こころ・からだ)	子どもとともに生活を創る保育者として学生が身につけるべき基本的な資質を踏まえ、テーマに即してその時々々の社会状況やトピックスも取り上げて授業内容を設定する。 (オムニバス方式/全15回) (土沢/5回)「いのち」をテーマに、自らのいのち、他者のいのち、また人間以外の存在のいのちにも思いをめぐらせ、その意味を理解する。 (中畝/5回)「こころ」をテーマに、自分の感情を把握し、客観的に見ることができ、それをコントロールしていく重要性を理解する。 (河田/5回)「からだ」をテーマに、健康と社会生活についての基本的な理解を深める。	オムニバス
	現代の教養講座Ⅱ (共感・信頼・共生)	子どもとともに生活を創る保育者として学生が身につけるべき基本的な資質を踏まえ、テーマに即してその時々々の社会状況やトピックスも取り上げて授業内容を設定する。 (オムニバス方式/全15回) (日吉/5回)「共感」をテーマに、他者と気持ちを理解することの難しさや大切さについての理解を深める。 (入江/5回)「信頼」をテーマに、「信頼」が社会生活を可能にする不可欠の条件であることを理解し、互いに「信頼」を深める生き方について講義と討論を行う。 (和田/5回)「共生」をテーマに、子どもから高齢者までが、一つの空間の中で生活することの意味について概観する。	オムニバス
	現代の教養講座Ⅲ(個・集団・社会)	子どもとともに生活を創る保育者として学生が身につけるべき基本的な資質を踏まえ、テーマに即してその時々々の社会状況やトピックスも取り上げて授業内容を設定する。 (オムニバス方式/全15回) (牧野/5回)「自己」をテーマに、自分自身を見つめ理解することの重要性と自己認識の必要性について講義を行う。 (間野/5回)「集団」をテーマに、集団のなかでいかに行動すべきなのか、また、自分の行動が集団にもたらす意味を考える。 (岡田/5回)「社会」をテーマに、社会の中で果たす「責任」の意義について、さまざまな観点から考え、理解を深める。	オムニバス

様式第2号(その3の1)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎教育科目	現代の教養講座Ⅳ（美・宗教・自然）	<p>子どもとともに生活を創る保育者として学生が身につけるべき基本的な資質を踏まえ、テーマに即してその時々の社会状況やトピックスも取り上げて授業内容を設定する。</p> <p>（オムニバス方式／全15回）</p> <p>（中畝／5回）「美」をテーマに、人はなぜ美しいという感情が生まれるのかについて、一緒に考えていきたい。</p> <p>（青柳／5回）「宗教」をテーマに、いくつかの宗教を取り上げ、その世界観と死生観について理解を深める。</p> <p>（大久保／5回）「自然」をどう捉えるかをテーマに、生物たちの生活の姿を学び、そこから人間社会における私たちの自然との共生のあり方を考える。併せて、時代ごとの人々の自然観の変遷を概観する。</p>	オムニバス
	生活講座Ⅰ （子どもと生活科学・食育）	<p>子どもの生活と密接にかかわるためには、まず、学生自身が自立した生活者であることが大切な条件となる。そのうえで、子どもの生活について学んでいくことで、子どもの生活を理解し、実践することが可能となる。具体的には、生活の基本となる衣食住生活全般について、科学的・実践的知識を学ぶことで自立した生活者を目指す。また、発達により変化する子どもの衣食住生活について学ぶとともに、特に現代的課題である食育の問題についても考えていく。</p> <p>（オムニバス方式／全15回）</p> <p>（蟹江／5回）自立した生活者であるために、家庭と仕事の現代的意味について学ぶ。</p> <p>（桂木／5回）生活の基本となる衣食住生活のうち、衣と住生活を題材にして、科学的・実践的な知識を学ぶ。</p> <p>（松田／5回）食育をテーマに食生活の重要性について理解を深める。</p>	オムニバス
	生活講座Ⅱ （子どもと生活文化）	<p>それぞれの社会には、それぞれの文化があり、それを学ぶことは、自分自身の社会や文化を見直すことにもつながる。まずは、諸外国の文化を学ぶことから始まる。日本の文化では行われないようなことが、外国では当たり前に行われていることがある。こうした慣習の違いはどこに由来するのだろうか。また、こうした慣習を支えている価値観はなにか。さまざまな事例を見ながら、一緒に考えていきたい。そして、私たち自身の文化のあり方についても、相対的に見ることでできる視点を養いたい。</p> <p>（オムニバス方式／全15回）</p> <p>（駒場／8回）諸外国の文化についての理解を深める。</p> <p>（堀／7回）日本の伝統的な生活文化について理解を深める。</p>	オムニバス
	生活講座Ⅲ （子どもの生活と経済・経営）	<p>子どもの生活を理解するためには、まず、社会全体の仕組みを理解し、その現状と課題を把握したうえで、子どもの生活について学んでいく必要がある。生活経済の観点からは、国民経済の4主体（政府・企業・家計・非営利組織）について、その仕組みや役割、現状と課題などから把握するとともに、各主体と子どもの生活との関連について学んでいく。また、生活経営の観点からは、特に生活時間管理や金銭管理などから、大人と子どもの生活について考えていく。</p>	

様式第2号(その3の1)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎教育科目	職業と家庭生活の設計	社会環境の変化に伴い、人生のどの時期に就職するか、結婚するかしないか、子どもを持つかもたないか、人々の生き方や働き方はきわめて多様になっている。生涯を通じて自分の興味や関心にあった職業を継続し、職業上の能力を高めていくために必要なキャリアプランを立て、職業と家庭生活のバランスをとって生活することの必要性について学ぶ。ライフプランの主要な要素である仕事と家庭の特徴—日本の労働・雇用慣行や家事、育児、介護などの家庭内労働—について基礎的知識を得るとともに、保育や教育などの労働の社会的特徴を知り、自分自身の生涯のライフプランを計画できるようにする。	
	子どもの生活史	子どもの生活は、社会環境の変動の影響を大きく受ける。戦後の日本社会は、大きな社会変動によって、これまでの社会観、家族観、子育て観は大きく変化をしている。まずはベースとなる日本の社会変動について講義をしていく。こうした変化に伴い、子どもの生活はどのように変化したのか。具体的な事例を踏まえながら講義を進めていく。そして、現在子どものおかれている生活環境をどのようにとらえて保育をし、子どもを育てていくのか。この課題を共有しながら講義を進め、学生がこの課題解決に向かっの意欲と目標を得られるように授業を進める。	
	人間とは何か	人間とは、人と人との間にあって、感情にゆれながら理性的に生きるものである。科学や文化が進み、ありあまる物や情報、誘惑に囲まれながら、あなたらしく生きようとしているか。充実した人生を生きようとしているか。あなたは、社会に対して、何をどのように貢献できるか。それには、まず他を知り自分を知ることが必要である。「人間」のさまざまな姿を材料にしながら、「人間存在」について、多角的に捉える姿勢を身につけることを目的とする。自分自身について考えるばかりでなく、自分と他者、自分と世界との関係を把握するために、さまざまな事例を取り上げ、人間にとって基本的で不可欠な「考える」ということの意味を理解する。同時に、「考える」ための具体的な方法を知る。	
	人間と心理	心理学理論から人の心理学的理解とその技法の基礎となる部分を理解し、人の成長・発達と心理の関係性、日常生活と心の健康との関係性、心理的支援の方法と実際について理解することを目的とする。大別すると人間の成長・発達について学び、つぎに、人間の成長・発達に伴う心理的变化について、さらに、日常生活と心の健康についてという流れで人間の心理的援助について考えていく。到達目標は、心理学的理論について知っている、人の発達と心理的影響を理解している、上記を踏まえて心理的支援の方法を知っていることである。	

様式第2号(その3の1)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎教育科目	コミュニケーションの心理学	本講義では、学生の間形成や対人関係の望ましいあり方を模索することを目的とする。人間関係をめぐる心理学のさまざまな課題をともに作業しながら、考え、議論をしていく。はじめに、「出会い」を心理学的に考えてみる。そして、対人魅力・親密な人間関係について学び、対人コミュニケーションやコミュニケーションとメディアについての講義を進める。そして、人間関係の問題を心理学的に学び、最後に、「幸福」を心理学的に学ぶ、幸福感とコミュニケーションについて言及する。	
	環境と共生	生物種の多様性保全をはじめとする自然環境意識は、幼少時の自然体験のあり方に大きく影響される。この科目では、子どもたちに自然を体験させる環境教育のための基礎として、“自然の見方、捉え方”を生態学的な視点から学ばせることを主題とする。すなわち、多様な生物種の生活史の研究例を紹介し、生態系の場で、生物たちがいかに巧妙な戦略のもとに生活を営んでいるかを理解させる。受講者が子どもたちにそれを易しく説明でき、かつ興味をもつように仕向ける能力の養成を意図する。さらに、西欧などの環境先進国が生態系の代替地と位置づける生態回廊の考え方を“島の生態学”の概念に基づき解説し、身近な自然の保護の大切さを学ばせる。保育内容自然・環境の演習（自然体験）との密接な連携にも留意する。	
	子ども文化論	個性や創造性という人間性の喪失が問題になっている現代社会において、子どもの文化を見直し、それが子ども育成にとって、どのような意味があるのかについて考察していく。具体的には、玩具の概念や、機能、教育性、玩具と子どもの発達、玩具での遊びに対する配慮などについて学ぶ。さらに、絵本についても、その概念、機能、教育性や絵本の現状、そして、絵本の歴史の変遷についても学んでいく。また、現状の子どもの玩具についての問題点についても考察する。	
	少子高齢社会と福祉	社会経済的要因の変化や平均寿命の伸長により、高齢者の意識やライフスタイルが大きく変化をしている。とりわけ、都市部における高齢者世帯の増加は、都市の中にもいわゆる限界集落を生み出すなど、生活環境や消費、産業、雇用、住宅、家族関係などさまざまな分野に影響を及ぼしている。そこで、少子高齢化の要因とその影響を踏まえながら、少子高齢社会とは何かを理解し、子どもと高齢者の生活環境の実態を把握する。具体的には、社会経済的要因や人口学的要因による少子高齢化の現状ならびに高齢者のライフスタイルの変化とその対応策について学ぶ。	

様式第2号(その3の1)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎教育科目	日本国憲法	<p>家庭内暴力による児童虐待、産科・小児科医不足による出産・医療の危機、保育園の不足による待機児童の増加、学校でのいじめによる不登校の増加、私立小中学校や塾による教育格差の増大など、子どもを取り巻く環境が厳しくなりつつあることをうけて、子どもに関する政策も転換期を迎えつつある。</p> <p>未成年者は選挙権がなく、子どもについての政策は大人世代が十分に配慮をしなければならない存在である。</p> <p>本学部の卒業生が子どもに関するエキスパートとして活躍する前提知識として、憲法の人権規定を中心に学び、子どもの人権をめぐる憲法上の様々な問題について考える。</p>	
	都市社会学	<p>本講義は、都市社会学の基礎的な概念を学習しながら、それらが都市における諸問題についてどのように適応できるかを考えることを目的とする。都市と農村はどのように区別され、それぞれの特徴はどのようなものなのか。見慣れた郊外の風景は、どのように形成されてきたのか。郊外化にともなって推進された「コンパクト・シティ」とはいかなるものか。複雑化・多様化する都市・社会は、そこに生活する子どもにどのような影響を与えているのか。こうした問題について都市社会学的な見地から検討する。</p>	
	現代日本史	<p>第二次世界大戦後の日本の復興と、冷戦後に残された諸問題から、現在の日本社会へ至る歴史的過程を大局的に把握することを目的とする。特に農地改革・財閥解体・労働改革の3大改革と呼ばれる民主化措置と、朝鮮戦争やベトナム戦争における補給物資の生産や輸送による特需、さらに1960年代から70年代初めまで続く高度経済成長とその後の成熟化時代を中心に講義を行う。</p>	
	食品の消費と流通	<p>近年、消費者の食品に対する安全嗜好への高まりから、トレーサビリティ（＝食品の流通経路を生産から消費段階までの追求が可能な状態）への関心が急速に高まって来た。本講義では、消費者の視点から各食品の多様な流通経路について概観していく。また、「食育基本法」により、子どもたちに「食を選択する力」を育むことが求められていることから、保育者の視点からも、こうした基礎知識と教養を身につけさせることとしたい。</p>	

様式第2号(その3の1)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎教育科目	生活技術演習Ⅰ	<p>ヒトとして自立した生活を営むために必要な基本的な生活の技術を習得することを目的とする。生活科学で得た知識を基本として、自己の健康管理・自立した衣・食・住生活ができるように、バランスのとれた食品の選択、調理法・被服の選択・管理法、住生活環境の整え方等を実習を通して学ぶ。(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(百田/8回)被服の選択・管理法、住生活環境の整え方等を学ぶ。</p> <p>(松田/7回)自己の健康管理・自立した衣・食・住生活ができるように、バランスのとれた食品の選択、調理法を学ぶ。</p>	オムニバス
	生活技術演習Ⅱ	<p>生活支援演習Ⅰを踏まえ、さらに実践的な生活の実際について学ぶ。生活とは、毎日の暮らしの繰り返しであり、そこには、当該社会の実践的な思想が反映されている。日々の暮らしを客観的に見つめることで、そこにある日本文化の考え方も学修する。Ⅰと同様に衣食住に関する基本的な技術を体得し、自己の心身の健康を考えた、自立した生活ができるようになると同時に臨機応変に気配りをもって自立支援ができるようになる。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(百田/8回)被服の選択・管理法、住生活環境の整え方等を学ぶ。</p> <p>(松田/7回)自己の健康管理・自立した衣・食・住生活ができるように、バランスのとれた食品の選択、調理法を学ぶ。</p>	オムニバス
	スポーツと健康Ⅰ (講義を含む)	<p>授業のねらいは、自己の健康・体力に対する認識を深め、健康・体力づくりのための運動方法を理解し、生涯にわたって自主的に健康・体力づくりをする能力や態度を高めることである。授業全体の内容については、体育の意義・歴史などについて理解を深め、体育・スポーツが身体・精神・社会性に及ぼす効果について学習する。到達目標としては、体育と健康的な生活の関わりについて理解する。あわせて、球技(バレーボール、バスケットボールなど)、体操を通して、体力・技術を養う。さらに器械運動における試技と補助の方法を学習する。</p>	講義5回を含む
	スポーツと健康Ⅱ (講義を含む)	<p>授業の目的は、生涯にわたって自己の心身の状態に適したスポーツを生活の中に取り入れ、豊かなライフスタイルを形成できる能力を身につけることにある。また、スポーツ科学における運動が身体機能に及ぼす影響について理解を深める。授業内容については、球技(バレーボール、バスケットボールなど)、体操を通して、体力・技術を養う。さらに器械運動における試技と補助の方法を学習する。また、理論においては、運動生理・機能解剖学から体のしくみとスポーツや運動の必要性を理解する。到達目標は、ゲームでのスキルアップ、器械運動の補助の修得、理論における理解を目標とする。</p>	講義3回を含む

様式第2号(その3の1)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎 教育 科目	オーラル イングリッシュ I	授業の目的は、身近で興味深い題材をもとに、平易な英語を用いた基礎的な聴解力および口頭発表力を身につけることをねらいとする。授業全体の内容は、日常的な場面でのやりとりをする、まとまりのある比較的平易な英文を聞いて、その概要や要点を理解する、特定の情報を得るために必要な部分を聞き取る、細部にまで注意して聞き取った英文を書き取る（ディクテーション）、語彙や単文レベルの発音練習・文型練習・誘導会話練習を行う、インフォメーション・ギャップを利用した情報取得活動を行う、自分の考えや意見などをまとめて口頭で発表するなどである。昔から伝わるナーサリー・ライム（わらべ歌・子守歌）を取り入れた活動も行う。到達目標は、英語による基礎的なコミュニケーション能力を身につけることである。	
	オーラル イングリッシュ II	I に引き続き、授業の目的は、身近で興味深い題材をもとに、平易な英語を用いた基礎的な聴解力および口頭での発表力を身につけることをねらいとする。授業全体の内容については、日常的な場面でのやりとりをする、まとまりのある比較的平易な英文を聞いて、その概要や要点を理解する、特定の情報を得るために必要な部分を聞き取る、細部にまで注意して聞き取った英文を書き取る（ディクテーション）、インフォメーション・ギャップを利用した情報取得活動を行う、自分の考えや意見などをまとめて口頭で発表するなどである。英語の歌、大統領の演説、NHK ニュースの英語版等を用いた活動も行う。到達目標は、I で修得した英語による基礎的なコミュニケーション能力をさらに高めることである。	
	第二外国語 I (フランス語)	フランス語は、1919年のベルサイユ条約で英語が国際条約の正文として採用されるまで、国際語、外交用語の地位を独占してきた言語であり、現在もヨーロッパの社会・文化に深く根ざした言語のひとつである。フランス語の習得は、ラテン語から派生した他の外国語（スペイン語、イタリア語、ポルトガル語、ルーマニア語など）を習得する際の基礎ともなる。フランス語とそれをとりまく、豊かな文化・文明の基礎を学ぶ。授業では、動詞の活用を中心として外国語習得の基礎となる文法事項をやさしく解説し、実際にコミュニケーションで使えるフランス語の習得をめざす。	
	第二外国語 II (フランス語)	フランス語は、1919年のベルサイユ条約で英語が国際条約の正文として採用されるまで、国際語、外交用語の地位を独占してきた言語であり、現在もヨーロッパの社会・文化に深く根ざした言語のひとつである。フランス語の習得は、ラテン語から派生した他の外国語（スペイン語、イタリア語、ポルトガル語、ルーマニア語など）を習得する際の基礎ともなる。フランス語とそれをとりまく、豊かな文化・文明の基礎を学ぶ。授業では、フランス語 I に引き続き動詞の活用を中心に、表現の幅を広げるとともに、平易で自然な日常フランス語の習得を目指す。	

様式第2号(その3の1)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎教育科目	第二外国語Ⅲ (中国語)	中国語は、経済のグローバル化によって益々その需要が高まっている言語の一つである。日本人にとって中国語は、他のヨーロッパ言語とは異なり、漢字を用いることから親しみやすい言語と言える。授業は、中国語の基本段階と実践段階に分ける。基本段階では、ネイティブスピーカーの発音に近づけるべく、子音の発音、母音の発音、声調を練習し、身に付ける。実践段階では、挨拶、人称代名詞、数詞、指示代名詞、名詞述語文、形容詞述語文、動詞述語文、各種の疑問文(疑問詞・反復・選択・省略疑問文)等の基本的な文法項目の習得を目指す。語学の学習を通して、今の中国、また中国の伝統と文化について理解し、中国に関しての知識と教養を持つことを目標とする。	
	第二外国語Ⅳ (中国語)	激動の荒波の中で飛躍的な成長を遂げている中国との対話と交流は、今の日本にとっては一つの大きな課題であろう。本授業では、入門中国語を終えた学生を対象とするクラスである。基礎的な文法を習得した上、様々な補語(時間・程度・方向・結果補語)、連動文、受身文、使役文等も勉強し、より豊富な表現力を身につける。授業には会話を中心とし、日常生活や学習の場面を想定した実用会話を勉強する。あらゆる方法で「読む」「書く」「聞く」「話す」という総合力のトレーニングを行う。中国語によるコミュニケーションの実力を、一年間の学習を通して、段階的に身につけていくことを目的とする。達成目標: 1. 正しい発音は言うまでもなく、ある程度の単語量も有すること。2. 基本的な文法を習得し、やさしい文の組み立てができること。3. テキストの本文、会話文の内容を理解すること。4. 中国語によるやさしい会話の力があること。	
	第二外国語Ⅴ (韓国語)	授業の狙いは、韓国語を初めて学ぶ学習者を対象に、「読む・書く・聞く・話す」の四つの基礎能力を養うことにある。内容は、韓国語の文法と会話に焦点を当てる。具体的にまず文法では、韓国語の文字と発音を中心に、子音・母音・パッチム(終声)の構造について教授する。それに加え、日本語との基本的な文法構造を比較しながら、肯定文、否定文、疑問文などを学習する。次に会話では、簡単な日常会話が可能になるように、初級文法を踏まえながら、文型を通して学習していく。とりわけ会話の授業では、演習形式を取り、ペアワークを通して、実践的なコミュニケーション能力を身につけることを目標とする。	
	第二外国語Ⅵ (韓国語)	本授業の狙いは、前期の基礎を踏まえながら、それをより発展させた形で、基礎会話の運用能力や、簡単な作文能力を身につけることにある。会話能力を高めるために、初級文法を駆使した短文からはじめ、徐々に語彙や文型を増やしていく中で、合わせて長文の作成を学習していく。授業の方法は、会話グループを決め、口頭演習を行ったり、直接文章を考えてみたりするなど、演習形式を採用する。さらに、副教材を用い、韓国の映画やドラマなどを通じて、現在の生きた韓国語の表現を学ぶ。本授業の最終目標は、基礎的な日常会話が可能になることと、簡単な日記文や挨拶の手紙文が作成できることを目指す。	

様式第2号(その3の1)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎教育科目	情報処理入門Ⅰ	Ⅰでは、学生生活や、社会に出てから役立つ基礎的なコンピュータの技術と知識の習得を目指す。まずパソコンの基本操作と日本語入力について学んだ上で、Microsoft Wordによる文書作成をはじめとして、インターネットによる情報検索や電子メールの送受信などの方法を習得する。これはレポート作成や事務処理に必要な不可欠な技術である。また、インターネットを利用する上でのマナーや情報倫理、ネットワーク犯罪やコンピュータウイルスから身を守るための情報セキュリティについて解説する。さらに、子どもによるパソコンや携帯電話の利用状況や、子どもがインターネットやメールを利用する際の注意点についても解説する。	
	情報処理入門Ⅱ	Ⅱでは、コンピュータを用いた多様な情報表現の技術と知識の習得を目指す。まず、表計算ソフト(Microsoft Excel)による数値データの集計、グラフ化の技術を習得する。次に、イラストやアニメーションなど、子どもにも分かりやすい情報表現を実現するためのソフト(Adobe Photoshop/Flashなど)の操作について学ぶ。また、これらのソフトと文書作成ソフト(Word)との効果的な連携のために、情報理論の基礎やオペレーティングシステムの役割と活用法について解説する。さらに、入出力装置などの周辺機器をはじめとするハードウェアに関する知識についても適宜紹介する。	
専門教育科目	保育と教育		
	保育・教育の本質・目的の理解		
	保育原理Ⅰ	本授業の目的は、保育の基礎・基本について考える力を養うことである。保育に関する知識を学ぶことはもちろんであるが、その知識を実践に応用する「保育実践力」を身に着けることを目標に、子どもを見る目を養い、子どもを伸ばしていく保育観、かかわり方について学ぶ。保育者としての自分のあり方を見つめ、考える力、表現する力、行動する力など、自分の可能性を広げて豊かな人間性を磨いていく。講義の中では、レポートの作成やグループによる討議や発表も行っていく。	
	保育原理Ⅱ	保育の意義と保育者の役割をふまえ、保育の基本的な考え方、子どもの理解、保育者としてのかかわり方、保育の方法を学ぶ。急速に変化している社会のあり方や保育制度、多様な保育ニーズを踏まえて、保育所及び児童福祉施設の役割とその在り方を具体的に考える。また保育の歴史と保育思想を学び、先人の知恵と努力の足跡を学び、これからの保育を考えるてがかりとすること。保育の基本的な考え方を理解し、子どもにかかわり援助する方法を学び、実践する意欲を持つこととする。	

様式第2号(その3の1)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目 保育と教育 保育・教育の本質・目的の理解	教育原理 (小学校との連携を含む)	教育の諸問題を考える上で前提となる教育学の基礎的概念を体系的に学び、その実践的意義を理解する。教育的営為の本質、その基本的機能の理解からはじまり、学校教育の目的・内容・方法・制度に関する理論と実践について学ぶ。すなわち、「人間形成と教育」「社会環境と人間形成」の理解からはじまり、公教育の理念と制度、教育課程、学習指導、生徒指導、教育評価等学校教育の諸理論とその実際について学ぶ。テーマに即して、適宜、幼児教育の問題にも言及する。	
	教職概論（保育者論）	幼稚園教諭免許状取得を目指す学生に、教職への理解を深めるとともに、日々幼児と生活をともにし、発見や喜びを分かち合い、成長を見守り、必要なときに援助をさしのべる幼稚園教諭としての自覚と資質向上に努めることができるようにする。教職の意義と教員の役割について、仕事の内容、保育者としての専門性、実際の保育実践に学びながら、指導計画や保育の評価について理解を深める。また、子ども権利条約や子どもを取り巻く社会状況から、子どもを如何に守るか、視野を広げて考える。	
	教育制度	戦後の教育制度は、日本国憲法に定める教育を受ける権利、教育の機会均等を保障することを基本理念とし、義務教育無償、義務教育年限の延長、男女共学等を柱とした6・3制の学校制度となった。教育基本法が戦後60年にしてはじめて改正され、根本的な教育改革が進行している。日本における教育制度の歴史と現在の制度の仕組み、および日本の教育制度が教育の機会均等に果たしている役割について理解し、あわせて現在の教育制度の抱えている課題についても理解する。	
	発達心理学	人は加齢とともに変化し発達し続ける存在である。受精・誕生のときから、社会・文化という枠組みの中で、初期の胎児と母体との相互作用が始まり、出生後は親、友達、保育者、教師など他者との相互作用を通じて、情動的にも認知的にも変化を遂げていく。この変化には、発達の時期に応じて特徴的な心理的特性が生じる。本講義では、身体的発達、情緒的発達、認知的発達を社会・文化との相互作用の視点を織り込みながら、主に乳幼児期から青年期までの人間の発達について心理学的に検討していく。「発達段階」を理解し、初期経験の重要性を学び、それぞれの発達期の特徴を知ることを通して、子どもの発達を的確にとらえる必要性を正しく認識し、乳幼児期における発達援助のあり方について考えられることを目標とする。	

様式第2号(その3の1)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門 教育科目 保育・教育 の 対象 の 理解	発達支援論	まず、生涯発達の過程において、主体の発達を援助する理念、方法や技術、制度がどのように共有されてきたかを歴史的に理解すると共に、個別的、全人的、相互依存的、社会的人間の発達支援を生態学的な視点から学ぶ。さらに、現代の子育て環境が求める個に応じた発達の支援のための、個々の子どもの正しい理解と適切な援助のための知識や考え方を学んでいく。なかでも、とりわけ配慮が必要な生育環境や発達障害等により特別なニーズがある子どもについては、事例や具体例なども交えながら講義を行い、実践力の土台となるような知識や考え方を身につけつつ、発達支援の今後のあり方を考えることを目指す。	
	発達臨床心理学	人間の生涯にわたる発達・変容を視野に入れつつ、特に胎生期から思春期までの子どもの発達のプロセスをたどりながら、発達道程で直面する課題に即した臨床実践の在り方を学ぶ。人間の心の成長について考える発達心理学をベースにしながら、人生の中で生じる様々な心の問題について臨床心理学的視点から捉えていく。それぞれの時期に生じやすい心理臨床的問題を取り上げ、その実態や生起メカニズム、アセスメントの方法、心理臨床的対応について論じる。家庭、保育・教育、心理臨床など、様々な現場とのダイナミックな連携についても事例を用いて講義していく。乳幼児発達の理解を、乳幼児をはじめとする現場の心理臨床的な問題の理解、ならびに現実場面でのお互いの中に生じる情緒的な交流の理解に生かせる力をつけることを目標とする。	
	教育心理学	本講義では、教育心理学的なものの方の見方・考え方を養い、子どもを客観的視点で理解する力をつけ、実習での経験がより確かなものとなるような知識と教育者としての基礎的な考え方を習得する。具体的には、昨今の教育現場での問題・課題を取り上げつつ、人の心身の発達のメカニズムと諸相、そして、学習理論と学習指導法、また、性格と知識、教育評価、集団のとらえ方などについて、教育者として一人ひとりの子どもにかかわるための知識と考え方を学ぶ。	
	小児保健 I	保育者として子どもの心と身体の健康を守り、そして維持・促進させていくように援助する。そのために「あなたは如何なることを知りたいと思うのか?」、そのような問いに、どのような回答をだすのか。この授業で何を目標とし、何に動機づけられるのか?まずは、あなた自身の心と身体に問いかけることから講義を始める。主に講義を中心として子どもの心身の健康について学ぶ。身体の仕組みを知る。身体の成長を知る。心の仕組みを知る。心の発達を知る。心と身体の健康を維持、促進していくための保育者の心構えを自分なりに考察することができる。授業テーマに応じて、グループ討議なども行う場合がある。	

様式第2号(その3の1)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門 教育科目	保育・教育の 対象の理解 小児保健Ⅱ	<p>Iに引き続き、保育者として子どもの心と身体の健康を守り、そして維持・促進させていくように援助する。人間の赤ちゃんはある程度、成長しないとその機能が成熟しない。そして成熟している間に適切な働きかけがないとその機能をはたすこともできない。また、病気になってもその機能をはたすこともできない。</p> <p>「保育者として子どもの心と体の健康を守り、そして維持・促進させていくように援助する。そのためにあなたはいかなることを知りたいと思うのか」。学生自身、このことを常に頭に入れながら受講し、知識を身につけさせる。</p>	
	小児保健実習	<p>小児保健をふまえて、子どもの生活・成長にあわせた援助の方法について学ぶ。そして、子どもがかかりやすい病気とその予防や治療とケアについて学ぶ。さらに、保育者の行う健康教育の意義と実際を学ぶ。授業を通して、子どもへの援助技術を学び、また、保健指導に利用する教材作りや実際の援助について学ぶ。学生には、子どもへの保健行動の実際のためのスキルを身に付けるとともに、保健教育を行うための知識と実践の基盤を身に付けることを目標とし、実習の授業であることから積極的に取り組ませる。</p>	
	小児栄養Ⅰ	<p>小児期の食生活は、生涯にわたる健康と生活の基礎となる。そこで保育者として、保育の中で小児に適切な食事を提供することの意義や食生活が心の健康にも影響することを理解させる。また、食生活と家族や地域社会との関わり、生活全般や環境に関する望ましい姿を習得させる。具体的には、小児の健康な生活と食生活の意義や小児の心身の健康や生活と食生活の関係、家庭・地域における食生活の実態、栄養に関する基本的知識、妊娠・授乳期の食生活、乳児期の食生活等について、実際に調理を経験しながら学ぶ。</p>	
	小児栄養Ⅱ	<p>小児期の食生活は、生涯にわたる健康と生活の基礎となる。そこで保育者として、保育の中で小児に適切な食事を提供することの意義や食生活が心の健康にも影響することを理解させる。また、食生活と家族や地域社会との関わり、生活全般や環境に関する望ましい姿を習得させる。Ⅱでは、幼児期の食生活、学齢期・思春期の食生活、障害を持つ小児の食生活、障害の特徴と食生活と実際の食生活、小児期の疾病と食生活、さらには食育の実際を調理を経験しながら学んでいく。</p>	

様式第2号(その3の1)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門 教育科目	保育内容総論	<p>保育内容とは、幼稚園ならびに保育所において、保育の目標を達成するために展開されるすべての内容である。本授業では、幼稚園教育要領および保育所保育指針に示される保育内容の全体構造の理解に基づいて、子ども理解や保育方法について総合的にとらえる視点を養うことを目的とする。具体的には、幼稚園教育要領・保育所保育指針から子どもの発達の手え方を理解する。保育所・幼稚園といった保育の場では、どのような目標のもと、どのように生活を展開しているのか理解する。事例の検討や体験などを通して、子どもの生活の中心である「遊び」について理解する。さらに、実際の子どもの姿や保育場面に結びつけて、総合的に子どもを理解する視点と具体的な援助・環境構成を構想する力を養う。</p>	
	保育内容 自然・環境	<p>幼児期における環境との関わりが、幼児の人間形成にどのような意義があるかを考える。子どもは多様な環境の中で人間として必要な資質を身につけていく。その成長過程に適切な環境について学習する。自然現象や子どもを取り巻く社会事象を理解した上で、生活を営む態度の形成、豊かな心を育む環境等、保育に望ましい生活環境について演習形式で学ぶ。その中でも本演習では特に自然との関わりについて取り上げる。「環境と共生」の講義内容を踏まえ、まずは学生自身が五感を使い、身近な自然や素材に触れる活動を通し、知的な気づきを見いだす事やヒトの心理面に及ぼす効果を総合的に体験する。さらにこれらを保育に展開する方法について考察する。</p>	
	保育内容 健康	<p>乳幼児期は、生涯にわたる心身の健康を養う基礎となる。子どもは安定した情緒のもと様々な活動に取り組み、充実感・満足感を味わいながら健康な心身を育てていく。本授業では、まず、健康とは何か、その意義と子どもの心身の育ちの道筋について学ぶ。次いで、幼稚園教育要領および保育所保育指針の保育内容の領域健康に示される内容を理解する。その上で、子ども自らが健康で安全な生活をつくり出す力を養うための保育者の具体的援助や環境構成などの指導法や様々な役割を学び、理解を深める。テキストや視聴覚教材等から子どもの心身の発達の道筋および子どもの発達観を理解する。学生自身の生活や子ども期の遊び経験の振り返りなどの演習を通して、領域健康に対する理解を深める。</p>	
	保育内容 言語	<p>乳幼児期は、生涯にわたる言語獲得の基礎を養う大切な時期である。子どもの言葉の発達にとって、保育現場での人的環境および物的環境の重要性と保育者の役割・援助のあり方を学んでいく。子どもにとって言葉とは何か、そして、どのように獲得していくのか、また、どのような援助をしたらよいかをテキストをもとに、ビデオ視聴・ディスカッションを取り入れながら学びあっていきたい。また、絵本の読み聞かせ・昔話の語り部・紙芝居などの演習を通してその大切さを実際に体験し、方法を身につけていく。</p>	

様式第2号(その3の1)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門 教育 科目	保育内容 身体表現	保育内容領域「表現」の設定趣旨は、子どもの人間的な育ちに大切な感性を豊かに育てるとともに、感じたこと考えたことを表現し楽しむ意欲を養い、創造性を培うことである。そのため、保育者には子どもの活動や体験・思い・心の動き・つぶやき・まなざしなど、子どもなりの様々な表現を多角的に受け止め、返し、育てるといった適切な対応が求められる。また、豊かな感性を持ち、感じたことや考えたことが自分なりに表現して楽しむ、生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむことのできる子どもを育てるための支援について学ぶ。	
	保育内容 造形表現	幼稚園・保育園で活用できる、発達に合わせた造形表現活動についての自主的な教材を研究し、各自あるいはグループで作る指導案に基づいて実際に制作し、検討を加える。1年次の「図画工作Ⅰ・Ⅱ」の応用編として、今後の実習に向けて、0歳児から5歳児の発達に即した教材を取り扱い、その内容と指導法についての理解を深める。こうした造形表現活動は、乳幼児の人格や感性の発達にも重要な側面であることをしっかりと理解し、授業に取り組ませる。また、子どものモノに対する関心に共感できるように、自ら楽しむことができる教材を研究する。	
	保育内容 音楽表現	乳幼児期の子どもの生活における音楽遊びや音楽表現に焦点をあてて、音楽表現活動の意義や目的を学ぶ。また、音楽Ⅰ～Ⅳで学んだピアノ奏法や声楽、わらべうた、リトミックなどの音楽演奏技術をもとに、幼稚園や保育園での保育内容「音楽表現」の実際について、子どもの発達段階を踏まえた指導計画を立てて、実践してみる。四季折々に応じた子どもの歌やリズム表現、手遊び、楽器による表現法などさまざまな音楽表現の指導法を学ぶ。	
	保育内容 人間関係	幼稚園教育要領と保育所保育指針を踏まえ、保育者の子どもに対する具体的な援助のあり方や子ども同士が協力し、集団生活を送るための支援について学んでいく。さらに、保育現場での保育者と子どものかかわり、また、子ども同士のかかわり、保育者と保護者とのかかわり、親子関係についても捉え、子どもたちがどのように人間関係の多様性から学び、発達する存在であるかについて考えられるようにする。個を尊重することと関係性を高めることとの重要性についても学ぶ。	

様式第2号(その3の1)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目 保育と教育 保育・教育の内容・方法の理解	保育内容基礎演習Ⅰ	フィールドワークⅠで持ち寄った記録をもとに、そこにあるさまざまな問題を発見し、全体で、あるいは少人数でその問題についての理解を共有する。また、実際の子どもの活動を体験しながら、子どもの気持ちになって見ることも大切である。さらに、これらの記録を保育内容の5領域に結びつけながら、子どもの活動についてはじめての学際的理解につながるような演習にしていきたいと考えている。学生には、これらの観察結果が、いろいろな授業科目と関連づけられ、理解させる。	
	保育内容基礎演習Ⅱ	フィールドワークⅡで持ち寄った記録をもとに、そこにあるさまざまな問題を発見し、全体で、あるいは少人数でその問題についての理解を共有する。また、実際の子どもの活動を体験しながら、子どもの気持ちになって見ることも大切である。さらに、これらの記録を保育内容の5領域に結びつけながら、子どもの活動についてはじめての学際的理解につながるような演習にしていきたいと考えている。学生には、これらの観察結果が、いろいろな授業科目と関連づけられ、理解させる。	
	保育方法論（情報機器及び教材の活用を含む）	<p>幼児期にふさわしい教育の方法について学ぶことを目的とする。一般教育の方法との関連で、幼児教育の特色は何か。幼児期にふさわしい教育の方法及び技術についての知識を深め、幼児教育者に必要な保育実践力[理論を実践に応用する力]を身につけることを目標とする。幼児期にふさわしい教育がどのように行われてきたか、その歴史や思想をたどり、先人の知恵を学ぶ。現代の保育の基本である「環境を通しての教育」「遊びを通しての指導」についての指導法、さまざまな保育の形態の中での指導法、乳幼児の発達の特長を踏まえた指導法などについて学ぶ。また情報機器及び教材について、その活用法を学習する。</p> <p>(全15回) (日吉/13回) 情報機器の操作以外の部分を担当。 (高丸/2回) 情報機器の操作の部分を担当。</p>	オムニバス
	幼児教育課程論	<p>幼稚園教育要領・保育所保育指針では、子どもの主体的活動を基盤にして、それを方向づけ、発展させることの重要性を強調している。では、このことを踏まえ、子どもの育ちを保障するために、保育者はいかに保育を展開していくのだろうか。本授業では、幼稚園・保育所における教育課程・保育課程の意義および構造について理解し、教育課程・保育課程の編成と指導計画の作成について具体的に理解することを目的とする。日々の保育実践において、保育者がどのように子どもを理解し、子どもの育ちを願い、見通し、それらを具体化するのか(保育の方法)について考察し、[教育課程・保育課程→指導計画→実践→反省・評価→再立案]の一連の過程について理解する。実際に指導計画を立案する等、指導計画を立案できる力量を身につけ、よりよい保育を構想し、実践する力の基礎を培う。</p>	

様式第2号(その3の1)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目 保育と教育 保育・教育の内容・方法の理解	乳児保育概論	0歳児, 1歳児, 2歳児の発達と保育について, 身体, モノの操作, 認知・言語発達, 社会的行動, 遊び内容, 感情, コミュニケーションなどの発達の大まかなプロセスについて学ぶ。それに対応した乳児保育の内容と方法について, 保育所は乳幼児が人間形成の基礎を育み生活する場であることを理解し, 生活, 遊びをキーワードに乳児保育の考え方の基本について学んでいく。さらに乳幼児が多様な人間と愛着関係を結ぶことを学び, 保育者に対する乳幼児の愛着行動と社会化について考える。	
	乳児保育演習 I	3歳児未満の発達, 乳児保育の基本について学んだことを, 実際の子どもの姿と対応させる。専門的知識や用語を用いて, 説明できるようにする。また多様化する保護者のニーズに対応するため, さまざまな保育の現場について視野を広げて捉える。Iの演習では, 乳児の発達と保育を0歳児, 1歳児, 2歳児の具体的事例の検討とともに学び, 乳児保育の内容と方法について, 乳児保育の考え方の基本について学んでいく。	
	乳児保育演習 II	3歳前の子どもの発達, 乳児保育の基本について学んだことを, 実際の子どもの姿と対応させる。専門的知識や用語を用いて, 説明できるようにする。また多様化する保護者のニーズに対応するため, さまざまな保育の現場について視野を広げて捉える。IIの演習では, 0歳児, 1歳児, 2歳児の具体的事例の検討をもとに, 保育者一子どものトラブル場面での仮想的やりとりから, 自らの対処について考えとともに, 保育者の立場, 子どもの立場に立って, それぞれの気持ちをイメージしながらより広い視点から考察することが必要になる。より実践に役立つような乳児保育の知識や考え方について学べるようにする。	
	フィールドワーク I	社会において, 子どもは実際にどのように生活し過ごしているのだろうか。まずは, いろいろな現場に出かけていき, さまざまな子どもの姿を観察する。フィールドは, 保育所や幼稚園, 施設だけではなく, デパートや公園, 家庭, 地域の様々な子どもための施設などもふくまれる。そこでの子どもの活動をつぶさに観察し, 記録する。そしてフィールドワークの記録を持ち寄って, 保育内容基礎演習 I のなかで, 現代の子どもの姿を5領域と結びつけて理解していきたいと考えている。さらに, 子どもの姿だけでなく, 一緒にいる大人の姿にも注目し, そこにあるさまざまな問題を発見する。	

様式第2号(その3の1)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目 保育と教育 保育・教育の内容・方法の理解	フィールドワークⅡ	<p>フィールドワークⅠで体験し、保育内容基礎演習Ⅰで学んだことを踏まえて、もう一回フィールドへ出ていく。1回目とは違った視点から、また違った場所へ出かけて子ども生活の実態を観察する。子どもが健全に育つ環境になっているか、子どもの生活のどこに問題や課題があるかをよく見て観察し、記録し、子どもの生活を体験する。そしてフィールドワークの記録を持ち寄って、保育内容基礎演習Ⅱのなかで、子どもの生活や子どもの姿を分析し、保育者として子どもの生活を担う者として、保育内容5領域や子どもの生活をゆたかな環境にしていくために、何を学習し研究していくかを考察する。今後の学習・研究の方向性を見出していく手がかりとする。さらに、子どもの姿だけでなく、一緒にいる大人の姿にも注目し、そこにあるさまざまな問題を発見する。</p>	
家庭支援と福祉	家族支援論（家族援助論）	<p>この授業の目的は、①子育て支援に携わるための科学的・理論的知識を習得すること。その上で、②現代の家族の問題について日本の状況に即して、子育て支援の現場を捉えることができるようになること。③少子高齢化社会における社会的育児の位置づけについて、家庭福祉の観点から歴史的変遷についても考えていく。④諸外国ではどのような子育て支援をおこなっているのかについて、紹介する。⑤実践で学んだことが生かせるように、子ども、保護者に軸足を置いた子育て支援の要点について学ぶ。</p>	
	家族支援演習	<p>家族支援論で学んだことを演習形式で実践に結びつけられるようにする。現代社会で子育てをするには多くの問題を抱えている。支援の一環として、実際の現場を緻密に観察することによって、支援者、保護者、子どもの視点から、現場への疑問や問いを明確化する。その上で、疑問や問いを追求する中で、これからの子育て支援のあり方について、新たな方向性を自分なりにもつことが可能になる。具体的には、子育て支援の現場について抱いた問いを探求する過程を、共有する機会を設ける。地域、環境、子育て支援施策を組み合わせることによって、考察を深められるようにする。それぞれの疑問や問いかけを深めることによって、子育て支援者の問題、親の問題、子どもの問題を統合して検討するような演習にしていきたい。</p>	
	家庭教育論	<p>日本の近代から現代への家族と生活の変動を振り返り、家族における子どものしつけや教育がどのように変化してきたかを考察する。特に社会の子育て観、国の教育政策などとの関連から、家庭における教育がどのように行われてきたか、子どもの成長にとってどのような意味を持っていたかを取り上げる。また、戦後の家族の構造、機能の変化から、今日の日本の家庭教育がどのような特徴と問題を持っているか、学校教育や地域での教育との関連を含めて考察する。</p>	

様式第2号(その3の1)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	社会福祉	人間の尊厳と自立を尊重し、これを支援する社会福祉についての、概念や理念、歴史、法律、制度、サービスなどについて学ぶ。社会福祉は、経済社会や家族構造の変遷とともに変化、発展してきた。そのような歴史的経緯を踏まえて、今日の社会福祉の状況について把握するとともに、自立した生活を営むために必要な情報や制度のしくみ、役割についての造詣を深める。本授業を通じて、福祉職である保育士に必要な基礎的知識と専門的技術の習得の重要性を確認、理解する。	
	児童福祉	この授業では、すべての子どもたちが幸せに生きる社会を実現していくという児童福祉の理念をもとに、児童福祉を担う専門職としての姿勢を養うことを目的としている。まずは、児童福祉の概念を理解し、子どもやその保護者の生活に起こる諸問題等から、現在の児童福祉の課題を把握する。また、児童福祉の成立の背景から、児童福祉制度の発展過程を理解し、今日の児童福祉の法制度や関連施策の法制度について学んでいく。そして、保育、児童養護問題、非行問題、障害児福祉、児童健全育成などのそれぞれの現状と子どもや保護者に対する支援の実際について理解を深めていく。その上で、子どもの健やかな育ちを保障するための権利擁護のしくみや保育者の役割について講義を行う。	
	養護原理	現在、家庭機能の崩壊や被虐待児童の増加など、子どもたちを取り巻く環境はより厳しさを増している。本来、子どもの養護の目標は、子どもの健やかな成長や発達を保障し、自立を支援することである。この授業では、児童養護とくに社会的養護について理解を深めることを目的とし、社会的養護の現状と課題について学ぶ。授業では、はじめに社会的養護が必要となる養護問題の現状や背景を理解し、社会的養護の体系、施設養護の基本的原理について学ぶ。そして、子どもの生活の場である施設において営まれる権利擁護に視点を置いた養護内容から、児童福祉施設における養護の実際を理解し、保育士の資質や求められる専門性について理解する。さらに保育士として必要な児童観や施設養護観を養うことを目標に講義を進めていく。	
	特別支援保育の方法	発達ニーズあるいは保育ニーズのある子どもの理解と支援について学んでいく。主に、障害のある子どもあるいは虐待を疑われる子どもの心理的理解や支援方法、ノーマライゼーションやインクルージョンの考えから、障害を持つ子どもが一緒に園で過ごすことの意味、地域生活支援、家族への心理的および福祉的支援のあり方について検討する。障害児保育の意義、障害児を支える環境、障害児理解の方法と保育実践、障害児の保育計画、発達の遅れが見られる子どもの保育実践、家族および地域との連携や専門機関の活用についても講義をする。	

様式第2号(その3の1)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目 家庭支援と福祉	特別支援保育演習Ⅰ	<p>演習という授業形態を生かし、講義を受動的に聞くのではなく、「障害」をテーマに自ら想像し創造する体験を積極的に行い、「障害」という概念の複雑さを実感する。障害児保育についての学びを、演習での相互交流によって深めつつ、障害という枠を飛び越え、乗り越えて発達していくための保育支援をともに創造していく。障害のある子どもたちへの保育の原点を自らの力でつかみ取ってほしい。さらに、障害についての理解を深め、個別的援助や保護者への支援の重要性を理解できるようになってほしい。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (北岡/10回) 障害児保育についての理解を深める。 (中畝/5回) 保護者支援についての理解を深める。</p>	オムニバス
	特別支援保育演習Ⅱ	<p>Ⅰに引き続き、演習という授業形態を生かし、「障害」をテーマに自ら想像し創造する体験を積極的に行っていく。Ⅱにおいては、障害の中でも保育の現場で出会う機会が多い知的障害や広汎性発達障害、学習障害、注意欠如多動性障害、発達性協調運動障害などの「発達障害」について学んでいく。この授業では、これまで学んできた特別支援保育に関する知識を前提として、視聴覚教材や心理的疑似体験など様々な手法や教材を利用し、体験的に理解を深めていく。さらには、体験的理解を保育実践につなげるための配慮や支援技術について具体的に学ぶ。個々の学生の実感を大切にしながら、個性豊かな乳幼児の生活を確かに支え、発達を援助する保育の方法を自ら創造していく力を育み、特別支援保育の現場で生かせる実践力を養うことを目的とする。</p>	
	養護内容演習	<p>養護原理での学びをふまえて、児童福祉施設で生活している子どもたちの日常生活について更に理解を深め、子どもたちの生活を支える保育士等の責務について学ぶものである。また、子どもの心身の成長や発達を保障していくために必要とされる知識や技能を習得し、子どもの権利擁護をベースとした児童観や社会養護観を養うことを目的としている。授業では、具体的な事例を提供し、グループで討議すること、模擬的に児童福祉施設を利用している子どもの立場になって考えたり、児童福祉施設の援助者としての立場から生活プログラムを作成するなど、日常的に展開されている子どもたちの生活や保育士等の援助の内容について演習形式で学んでいく。</p>	
地域と子育て支援	相談援助演習Ⅰ (社会福祉援助技術)	<p>保育専門職として、対人援助の基本理念に基づき、知識・技術・表現方法について演習を通して体得し、幼児、児童及びその保護者に対して適切な援助活動が行えることを目指す。多様な保育ニーズに直面する保育の現場では、子どもの育ちについてのさまざまな相談や、特別な配慮が必要な子ども、その家族からの相談などがあり、保育者の高い専門性が求められている。そのため、Ⅰでは、はじめに保育者をめざす者としての自己覚知を促し、良好なコミュニケーションの方法について学ぶ。そして、保育士の職務として活用する機会が多い個別及び集団援助技術の事例を用いて、人権の尊重、自立支援、秘密保持等の保育者としての基本姿勢を理解する。</p>	

様式第2号(その3の1)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門 教育 科目	相談援助演習Ⅱ (社会福祉援助技術)	保育専門職として、対人援助の基本理念に基づき、知識・技術・表現方法について演習を通して体得し、幼児、児童及びその保護者に対して適切な援助活動が行えることを目指す。多様な保育ニーズに直面する保育の現場では、被虐待児や軽度発達障害児、あるいは特別な配慮が必要な子どもやその家族からの相談など、保育者の高い専門性が求められている。相談援助演習Ⅰの内容を踏まえて、ここでは、集団援助技術や地域援助技術を学び、保育の様々な場面で援助技術を用いることができるようになること目標とする。	
	子育て支援演習	子どもを育てる社会的な営みをサポートする社会的な取り組みについて理解を深める。子育て支援センターの実際を理解し、そこで行なわれている内容や取り組みについて学習する。子育て支援はなぜ必要なのだろうか。それを社会保障の観点から考えたい。日本の少子化は非常に深刻な事態に陥っている。それを改善させる子育て支援はきわめて不十分である。地域で、企業で、社会で何をすべきか。それを学生みんなで考えさせる。	
	保育相談	今、保育の現場では、複雑化した社会や多様な価値観、急激に変化する家族形態に取り巻かれた子どもたちが抱える心理的問題や、保護者の子育ての悩みや不安に対処できる力が求められている。この授業では、社会経験の少ない若者たちがそのような現状に対応するための土台となる知識を身につけ、保育相談の重要性を理解することを目指す。具体的には、以下の点についての理解を深める。1. 相談の目的と内容について基本的な知識を習得する。2. カウンセリングの基礎知識を習得する。3. 現代の子どもたちの心理社会的な諸問題を理解し、その対応を学ぶ。4. 保護者に対する子育て相談についての知識と対応を学ぶ。5. 保育相談における保育者の留意点について理解する。6. 子どもが抱える問題の発見、問題への対応、クラス経営などに果たす保育相談の役割を理解する。	
	精神保健	子どもの精神発達の様相とそれを促す適切な保育のあり方、養育者・保育者の心の健康について理解する。具体的には、各ライフサイクルにおける精神保健の重要性、特に子どもの発達と環境について学ぶ。子どもの精神保健とそれを支える保育者のかかわりについて学ぶ。到達目標としては、精神保健にまつわる関係法規と社会資源について知る。精神保健の意義を理解し、どのように対応すればよいかを各自が考えられるようになる。子どもの心の健康に関して家庭・地域・保育の連携の重要性を理解する。	

様式第2号(その3の1)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門 教育 科目	異文化理解と子育て	世界の様々な国々の子どもと保育の多様なあり方を理解し、日本の特質を考える。アメリカ、韓国、中国、フランス、スウェーデンなどの国々の、父親、母親の職業生活と家庭生活の実態、子どもとのかかわり方、家事や子育ての分担、子どもへの期待や悩みなどをいくつかの国際比較調査結果から知る。また、世界の主な国々の子育て支援の制度や仕組みを知り、日本の子育て環境の問題点や課題を考える。	
	児童館の機能と運営	子どもを取り巻く環境は、少子化・核家族・都市化なども作用し悪化している。また近年児童の安全安心をも脅かすような事件が多く発生し、子どもたちが自由に戸外で遊べない状況にもなっている。児童館の持つ機能と役割、そしてその具体的な運営方法について理解していく。 児童館で実施するプログラムの企画立案から準備・運営までを実際にできるように身につける。児童館が子どもたちを健全育成に導く有益な施設であることや、機能・役割・運営等について理解していく。子育て支援・放課後児童クラブの実際についても理解を深めていく。	
	子どもと地域福祉	少子化が進む中で、子どもたちの健やかな成長を図るためには、子育て家庭や福祉施設だけではなく、地域住民の子育て支援活動への参加や、行政との連携が不可欠である。子どもや子育てに関する社会的支援は、教育、保健医療、福祉など様々な分野で行われているが、地域によりニーズも異なる。地域における子どもや子育て中の家族のニーズを把握するとともに、各地域社会にはどのようなサポート資源が存在するのか、今後はどのような役割が期待されているのか、これらの点について学ぶ。	
	児童館実習	家庭や地域の生活実態にふれ、子ども達の健全な成長のために、児童館活動を通してどのような援助ができるのかについて学習する。授業全体の内容の概要としては、地域社会の子ども達を支えるための子どもの遊び場としての児童館の役割について学ぶ。また、母親の子育て支援、異年齢の子ども達のつながり、および地域社会の人たちとの連携について具体的援助方法を学ぶ。児童福祉の分野における児童の健全育成活動の内容とその目的について理解し、児童厚生員に求められる資質・技能及び今後の課題について説明できることを目標とする。	

様式第2号(その3の1)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	世代間交流	核家族化・少子・高齢社会の進展にともない、子育て家庭や子どもを取り巻く環境は著しく変化している。同時に、地域社会との関係の希薄化や家族機能の弱体化とともに、子どもたちが世代の異なる人々と交流する機会も激減している。こうしたなか、子どもと高齢世代の人々が連携できる機会を創出していくことが緊急の課題である。本講義では、子どもが健やかな成長を遂げていくうえで、子どもと高齢世代の人々が相互に助け合い、支え合える地域社会を再構築していくことの意味を明らかにすることが目的である。	
	子どもの生活とコミュニティ	現代において、子どもを取り巻く環境は従来とは大きく異なっている。いわゆる「空き地」がなくなり、子どもたちだけで遊ぶ自由な空間が消失した。これも都市化進行の一つの形態であるが、このコミュニティの変化が子どもの生活にどのような影響を与えているのかについて論じていく。また、都市化の進行にともない、コミュニティそのものが問直されている。近隣関係の希薄化し、共同作業そのものも地域から消えた。その結果、地域から切り離された家族が孤立し、家族のみが子育てや子どもの生活の中心となった。講義では、これからの子どもの生活がどのようにコミュニティと関わっていくのかについても論じていく。	
	都市コミュニティ論	本講義は、生活の場としての「都市コミュニティ」と市民の暮らしについて概説し、「こどもと生活」「こどもとその親を取り巻く地域社会・コミュニティ」の現状と課題について講じる。コミュニティとは何か、住民のライフステージ別のコミュニティ問題とその解決、それに向けた地域集団と行政との関係、担い手作りの問題等々コミュニティ問題は多層的多面的であるが、その本質は同じである。本講義は、栃木という都市コミュニティと農村コミュニティの共存している地域を例にしつつ、コミュニティ形成の課題、コミュニティの発展と地域の醸成、コミュニティの衰退と再生の問題を誰がどう解決していくか、特に、地域集団、行政を含めた地域のコミュニティ経営の観点から論じていく。	
	レクリエーション概論	本講義の目的は、まず、①レクリエーションについての基本的理解をすること、さらに②レクリエーション運動の経緯やレクリエーション運動を支える制度についての内容を踏まえたうえで、現代社会におけるレクリエーションの果たす役割を理解することである。また、③レクリエーション・インストラクターの役割や、レクリエーション・インストラクターによる支援の特色を理解すること、④そのための具体的な方法や、レクリエーション事業のプログラムの組み立て方、運営方法などを理解することである。授業の達成課題は、レクリエーションとレクリエーション支援の基本的理念の理解や、レクリエーション事業のプログラムの組み立て方や運営方法の理解ができてきていることである。また、乳幼児の遊び活動が発育発達上、いかに重要であるか理論的に学習する。	

様式第2号(その3の1)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目 地域と子育て支援	レクリエーション演習Ⅰ	レクリエーションおよびレクリエーション支援についての基本的な概念を押さえ、レクリエーション援助者としての役割について演習する。また、レクリエーションの体験を通して、主体(利用者)に有効なレクリエーション活動を実施できるよう援助方法についても学ぶ。具体的には、①コミュニケーション・ワーク(ホスピタリティとは、ホスピタリティの示し方、アイスブレイキングの意義と基本技術、アイスブレイキングのプログラミングのこと)、②目的に合わせたレクリエーション・ワーク、素材・アクティビティの選択・提供、③対象者に合わせたレクリエーション・ワークやアクティビティのアレンジ方法などを学ぶ。実際に乳幼児の遊びを体験することにより、各々の遊びの特質を理解する。	
	レクリエーション演習Ⅱ	レクリエーション援助者としての役割や援助方法について、学生自身がグループで、乳幼児を対象としたレクリエーション支援実習を演習形式で実際に行う。また、その際、目的に合わせた有効なレクリエーション援助が実施できるよう援助方法についても学ぶ。具体的には、①乳幼児に合わせたレクリエーション・ワーク、②乳幼児に合わせたアレンジ法の応用、③活動領域に合わせたアクティビティ、④指導演習を通しての指導体験などについて、実際にレクリエーションを企画・体験・実施しながら学んでいく。また、演習の内容としては、対象者である乳幼児及び援助者が、それぞれふりかえりを行う。	
	野外活動Ⅰ	野外活動に関して理解し、キャンプ活動におけるテント設営、野外炊事、キャンプファイヤー、などに関する基礎的知識と活動技術を習得する。また、安全管理を第一に考えながら乳幼児に合わせたキャンププログラムを立案する方法を習得する。野外活動は、幼児から高齢者に至るまで、また障害を持った人たちにとても楽しむことのできる活動である。そこで、野外活動の概論を講義し、キャンプ活動の動機付けを行う。さらに、キャンプ活動における基礎知識と活動技術の習得を踏まえて演習形式で授業を展開し、乳幼児に合わせたキャンププログラムの作成方法について、事例を参考にしながら講義を行っていく。	
	野外活動Ⅱ	冬季の自然活動の一つとしてスキー・スノーボードを楽しみ、自然を感じながら野外活動の基本的な技術や知識を身につける。また、スキー・スノーボード技術の向上を目指すとともに、コミュニケーション・スキルを高める。2泊3日の学外施設でのスキー実習では、現地インストラクターによるスキー・スノーボードのレベル別グループ講習や担当教員によるスキー・スノーボードに関する講義を受ける。2泊3日のスキー実習を通して、冬季の自然環境について理解するとともに、スキー・スノーボードに関する基礎理論、基礎知識、安全、およびマナーについて学ぶ。また、集団生活を通して、社会性を身につける。さらに、雪山における乳幼児の遊びを体験する。	集中

様式第2号(その3の1)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目 子ども産業と経営	施設経営論	<p>保育施設経営者のための講座で、保育・教育の関係法規、人事管理、財務・会計管理等の施設経営について学ぶ。今日、幼稚園・保育所に求められている多様な保育ニーズに対応し、保育者の専門性を高め、保護者との協力関係、関係機関との連携を密接なものとしつつ、選ばれる幼稚園・保育所になるための施設経営のあり方を考える。はじめに、保育制度改革と施設経営、施設整備の基本について俯瞰する。さらに、保育の最前線にたつ保育者の資質向上につき、処遇・研修とサービス管理の視点からチームワークの重要性を取り上げる。財務・会計では、日々の資金管理に加え、所定の財務諸表類についても学ぶ。今日、幼稚園・保育所経営といえども、外に開かれていることが求められるので、幼稚園・保育所の保育方針から始まる一連の情報提供の意義を考え、保護者や地域へ積極的な情報提供を行うことが、保育サービスの質を向上させるとともに、ひいては選ばれる幼稚園・保育所になるということ学ぶ。</p>	
	シティライフ学入門	<p>本講義では、都市で暮らす生活者の視点から、快適なシティライフを実現するための基礎的な素養を習得することを目指している。現在の都市生活がどのように成立してきたか、都市生活者の暮らしの特徴は何かについて説明するとともに、都市で展開されている産業と経済、文化、観光など様々な活動の実態を解説させる。さらに、これらの活動を支えている基盤（都市の自然環境、社会的なインフラ、社会的な制度、コミュニティ）について説明し、これが都市の諸活動にどのように関係しているかを学ばせる。これらを踏まえて、暮らしやすさ、環境、福祉、美観等の種々の観点から具体的な“まち”について説明し、シティライフについての理解を深める。</p>	
	経営学総論	<p>社会科学の中でも経営学は20世紀に飛躍的に発展した比較的若い学問であり、アートとサイエンスの側面を併せもった実践の学問である。本講義では、私たちが快適で健全な都市生活を送るうえで不可欠な存在である企業（組織）の行動原理と経営のダイナミズムを理解し、現実の経営現象に対する理解力や判断力を養成することを目的とする。企業の本質と活動、管理の仕組み、組織の仕組みなど、経営学の目的と対象や企業の意義と特質、経営理念と経営行動基準、管理の目的と体系などについて学ぶ。</p>	
	子どもと住環境	<p>良好な住まいと住環境は、子どもを健全に育てていく基本となるものである。本講義では、住まいと住環境の現状、これまでの住まいの変遷等の基本的な知識を習得するとともに、子育てに適した住まい、子育てに不可欠の住環境の要素等について理解させる。住まいに関しては、住まいの構造・計画面の知識に加えて、シックハウス症候群などの住まいに使用する材料等の問題や子育てしやすい住まいの間取り、家族の触れ合いを深める住まい方等子どもの生活に関連のある事項について重点的に取り上げる。また、住環境に関しては、遊び場や通学路等子どもが日常使用する施設についてその現状を理解させるとともに、防犯の観点から安心安全な住環境のあり方等についても説明する。</p>	

様式第2号(その3の1)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	生活者のための都市計画入門	都市計画は、生活にさまざまな面で大きな影響を与えている。本講義では、都市計画の理論と現状について概略的な説明を行った上で、都市に生活する生活者にとって特に関係の深い事項を中心に都市計画の基本を学ばせる。都市計画制度には、私たちの考え方を反映する仕組みが多く用意されている。生活者の視点から、都市計画の仕組みを活用する方法や活用事例等を紹介し、生活を向上させていくために、都市計画制度を役立てていくことを考える。講義には、一部ワークショップを取り入れ、身近に起こる都市計画上の課題をどう解決したらよいかを学生と共に考える。	
	NPOコミュニティビジネス論	利益を目的としない民間組織のあり方と活動を理解する。NPOは公共的役割を果たす民間組織である。コミュニティビジネスは「ビジネス」なので、一応利益は求めるが、地域の資源や人材の活用、地域社会の活性化などに主たるねらいがある。本講義ではこれらの組織の理論と実態を勉強する。具体的には、NPOの定義、コミュニティビジネスの定義、官・民・共の関係を踏まえ、栃木のNPOの活動について学び、その他、コミュニティビジネスの種類や活動、支援や助成についても学んでいく。	
	子どもマーケティング論	マーケットやマーケティングというと企業活動やビジネスのことと思われがちであるが、これから保育士や幼稚園教諭めざす学生にとって役に立つ授業内容とする。マーケティングにおける「顧客志向」やその満足度の追究は、現代のあらゆる社会の場面において追究されている。マーケットという観点で子どもたちを取り巻く環境とデザインについて一緒に考える。授業の目標は、学生のあらゆる進路に役立つマーケティングの基礎と考え方を身に付けることにある。	
	福祉と産業	福祉の概念が狭義から広義へと拡大する中、医療・福祉周辺分野が、今後期待される巨大市場として活性化しつつある。特に、子どもから高齢者まですべての人々を対象としたユニバーサル・デザインの考え方が民間企業の新規事業への参入を促進している。本講義では、日本の福祉政策と福祉産業の動向について学ぶことをねらいとする。具体的には、現代社会における福祉ビジネスの潮流について学びながら、松下グループやトヨタグループ、セコム、TOTO、ニチレイ、ワタミグループ、ベネッセ、ピジョン、キュービー、セガトイズ、コナミ、シダックス、クラブツーリズムなどのビジネス戦略の事例を取り上げる。また、家族形態の変容と高齢化に伴うビジネスの動向についても事例を取り上げて講義をする。	

様式第2号(その3の1)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	音楽Ⅰ	<p>保育・教育者としての音楽的基礎能力を高め、音楽の実践力を身につけることを目的とする。乳児・幼児・学童へとつながっていく音楽発展過程の理解を基礎とした上で、ここでは、ピアノの基礎技能とリトミック入門を通して、音楽の楽しさを体験する。リトミックを実際に体験することで、ピアノ演奏の楽しさにつながるような授業を行う。また、保育の現場で活かすことのできるピアノの演奏能力や指導力の獲得をめざす。グループ指導、少人数指導を組み合わせ、より効果的に行っていく。</p>	
	音楽Ⅱ	<p>保育・教育者としての音楽的基礎能力を高め、音楽の実践力を身につけることを目的とする。乳児・幼児・学童へとつながっていく音楽発展過程の理解を基礎とした上で、ここでは、ピアノの基礎技能と音楽理論の理解を通して、音楽の楽しさを体験する。音楽理論を学ぶことにより、より音楽を理解し、ピアノ演奏の楽しさにつながるような授業を行う。また、簡易伴奏を作る活動から、伴奏の必要性や役割を学ぶ。これらの体験を通して保育の現場で活かすことのできるピアノの演奏能力や指導力の獲得をめざす。グループ指導、少人数指導を組み合わせ、より効果的に行っていく。</p>	
	音楽Ⅲ	<p>保育・教育者としての音楽的基礎能力を高め、音楽の実践力を身につけることを目的とする。乳児・幼児・学童へとつながっていく音楽発展過程の理解を基礎とした上で、ここでは、ピアノの技能と発声法の基本、あわせて幼児の興味に沿った幅広い歌唱曲の指導法を学ぶ。また、平行して子どもの歌の伴奏（弾き歌い）を取り入れ、保育現場で通用できるレベルにまで高める。グループ指導、少人数指導を組み合わせ、より効果的に行っていく。</p>	
	音楽Ⅳ	<p>保育・教育者としての音楽的基礎能力を高め、音楽の実践力を身につけることを目的とする。乳児・幼児・学童へとつながっていく音楽発展過程の理解を基礎とした上で、ここでは、ピアノの技能とわらべうたを学ぶことにより、音楽の楽しさを体験する。保育の音楽活動の中心となるわらべうたを学ぶことにより、より音楽を理解し、ピアノ演奏の楽しさにつながるような授業を行う。また、保育の現場で活かすことのできるピアノの演奏能力や指導力の獲得をめざす。グループ指導、少人数指導を組み合わせ、より効果的に行っていく。保育・教育者としての音楽的基礎能力を高め、音楽の実践力を身につけることを目的とする。</p>	

様式第2号(その3の1)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門 教育 科目	音楽Ⅴ	保育・教育者としての音楽的基礎能力を高め、音楽の実践力を身につけることを目的とする。乳児・幼児・学童へとつながっていく音楽発展過程の理解を基礎とした上で、ここでは、音楽ⅠからⅣで学んだピアノの基礎技能とピアノ演奏技術を応用し、さまざまな演奏の形を楽しむ。保育の現場で活かすことのできるオペレッタ、合唱、簡易楽器演奏、わらべうた、リトミックの中から、各自が選択し、演奏能力や指導力の獲得をめざす。グループ指導、少人数指導を組み合わせ、より効果的に行っていく。保育・教育者としての音楽的基礎能力を高め、音楽の実践力を身につけることを目的とする。	
	リトミックⅠ	幼稚園・保育園で実践・応用できる内容でリズム・ピアノ演奏を含むリトミック指導法を学ぶ。リトミックⅠでは、3歳児(年少)を対象とする指導法と基礎的な動きを学習する。3歳児を対象とした保育内リトミックの指導ができるレベルを目指す。主な内容は、リトミックの説明と体験。リトミック指導資格の説明。基礎的な動き、基礎リズム(2拍子)強弱・テンポ・空間・アクセントや3歳児指導法、リズムカノン(導入 リズムフレーズ(2拍子・3拍子))、リズムと指導法の復習とまとめまでを演習形式で学ぶ。	
	リトミックⅡ	リトミックとは、音とふれあいながら音楽能力を育むことであり、音を感じて、身体的に表現することで、子どもの成長にとって重要な人格形成にも結びつくものである。Ⅰに引き続き、幼稚園・保育園で実践・応用できる内容でリズム・ピアノ演奏を含むリトミック指導法を学ぶ。リトミックⅡでは、年中・年長を対象とする指導法と基礎的な動きを学習する。年中・年長を対象とした保育内リトミックの指導ができるレベルを目指す。リトミックの説明と体験を通して、リトミック指導資格をめざす。	
	図画工作Ⅰ	この演習では、造形表現領域に関する子どもの実態、興味や関心、能力について学習し理解することを目的としている。同時に平面ならびに立体の表現活動を通して、指導者として必要な基礎的、基本的な知識、技能を習得させ、造形表現を高め、さらには、美的感性や感覚を伸展させることも同時に必要である。子どもの「造形表現」領域についての実態等については講義で、制作表現活動は平面、立体課題とも、それぞれ基礎基本的な面を重視し、可能なかぎりさまざまな材料技法体験を行う。	

様式第2号(その3の1)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門 教育 科目	図画工作Ⅱ	Ⅰに引き続き、造形表現領域に関する子どもの実態、興味や関心、能力について学習し理解することを目的としている。同時に平面ならびに立体の表現活動を通して、指導者として必要な基礎的、基本的な知識、技能を習得させ、造形表現を高め、さらには、美的感性や感覚を伸展させることも同時に必要である。具体的には、モダンテクニック（現代の技法）やレタリング（文字のデザイン）、折り紙、ペーパークラフト、粘土で作る（紙粘土）などを使って実際に作品を創造していく。	
	幼児体育Ⅰ	幼児の発育発達を重視した基礎的身体活動を考慮し、幼児教育現場における、徒手的・手具的・器具的運動遊びを体験する。具体的には、集団行動（整列・姿勢・隊列変化・方向転換・行進、整列・姿勢・隊列変化・方向転換・行進）、体操（振動・回旋・屈伸・伸展・捻転・倒・バランス、振動・回旋・屈伸・伸展・捻転・倒・バランス、組体操）、マット遊び（基本動作、応用動作、補助法）、跳び箱（基礎動作、応用動作、補助法）、鉄棒（基本動作、応用動作、補助法）などの運動遊び。実際に運動遊びの体験を通して、幼児の体力・運動能力を理解しそれぞれの運動遊びの目的、また効果的な指導展開法を学習する。	
	幼児体育Ⅱ	幼児の発育発達を重視した基礎的身体活動を考慮し、幼児教育現場における、徒手的・手具的・器具的運動遊びを体験する。具体的には、平均台（基礎動作、応用動作、補助法）、ボールを使った運動遊び（基本動作、応用動作、ゲーム）、縄を使った運動遊び（基本動作、応用動作）、フープを使った運動遊び、棒を使った運動遊びなどの運動遊び。実際に運動遊びをの体験をして、幼児の体力・運動能力を理解しそれぞれの運動遊びの目的、また効果的な指導展開法を学習する。さらに、指導計画（年間計画、単元計画、密案）を学習し、幼児の発育発達を重視した指導内容・方法を立案できる能力を身につける。	
	子どもと生活研究	生活科は、具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心をもつこと、自分自身や自分の生活について考えること、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付け、よき生活者として求められる態度や能力の育成を目的としている。また、「自立への基礎を養う」ことも目標としている。授業では栽培活動、自然体験、町探検等を取り上げ「見る・調べる・作る・探す・育てる・遊ぶ」という手法で体験活動を行い、生活科についての理解を深めるとともに、幼稚園教育との関連や小学校低学年の教育を視野に入れた保育について考察する。これらの経験から、学生自身が自らの生活を振り返り、保育者としての資質向上を目指す。	

様式第2号(その3の1)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目 基礎技能と教科	国語表現	幼稚園および小学校国語科での日本語指導の前提となる、日本語についての基本的な知識と技法について学ぶ。ことばに対する自覚的な態度の滋養をめざしたい。知識を詰め込むというよりは、各人がこれまで培ってきた自分自身の日本語の能力を、あらためて検証し、整理し、確認する形で進める。主な内容は、日本語と国語、ことばの獲得、ことばの機能、(記号と伝達、意味・意味作用、修辞)、現代日本語の素顔、現代日本語の根幹(音韻、文字、語彙、文法、構文)、日本語の変遷、などである。	
教育・保育実習	保育実習指導 I (保育所)	保育士資格を取得するためには、学内の関連科目の他、保育所実習および保育所以外の児童福祉施設の実習が必修となっている。実習に入る前に、保育所実習の意義と目的、保育所の機能と役割、実習日誌の書き方など、実習に関する具体的な技術、知識を学ぶ。また、実習後に実習体験の報告、討論、まとめを行い、実習日誌などの評価・指導を受ける。こうした学内の事前・事後指導の他に、実習園におけるオリエンテーション、さらには教員による巡回訪問指導も含まれる。	
	保育実習 I (保育所)	保育所の保育を実践に実践し、保育士として必要な資質・能力・技術を習得し、家庭と地域の生活実態にふれて、子ども家庭福祉ニーズに対する理解力、判断力を養うとともに、子育てを支援するために必要とされる能力を養う。授業全体の内容は、保育所の生活に参加し、乳幼児への理解を深めるとともに、保育所の機能と保育士の職務について学ぶ。授業終了時の達成課題は、保育の実際を理解することができる。また、保育士に求められる資質・技術及び今後の課題について説明する。	
	保育実習指導 I (施設)	保育所を除く、生活型の児童福祉施設において実習する。家庭を離れて施設で生活する子どもへの援助を直接体験することにより、施設で暮らす子ども、援助の方法、施設の役割と機能、職務のあり方と苦勞について理解をする。また、実習後の学習課題をみだし、保育士として子どもに対峙する上で必要な資質を養うことにつなげる。さまざまなハンディを持つ子どもに対する具体的な援助を観察したり、経験することにより、施設と施設職員の職務について理解を深める。	

様式第2号(その3の1)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門 教育 保育 実習 科目	保育実習Ⅰ（施設）	<p>保育所を除く、生活型の児童福祉施設において実習する。家庭を離れて施設で生活する子どもへの援助を直接体験することにより、施設でくらす子ども、援助の方法、施設の役割と機能、職務のあり方と苦勞について理解をする。また、実習後の学習課題をみだし、保育士として子どもに対峙する上で必要な資質を養うことにつなげる。さまざまなハンディを持つ子どもに対する具体的な援助を観察したり、経験することにより、施設と施設職員の職務について理解を深める。</p>	
	保育実習指導Ⅱ（保育所）	<p>保育士資格を取得するためには、学内の関連科目の他、保育所実習および保育所以外の児童福祉施設の実習が必修となっている。実習に入る前に、保育所実習の意義と目的、保育所の機能と役割、実習日誌の書き方など、実習に関する具体的な技術、知識を学ぶ。また、実習後に実習体験の報告、討論、まとめを行い、実習日誌などの評価・指導を受ける。こうした学内の事前・事後指導の他に、実習園におけるオリエンテーション、さらには教員による巡回訪問指導も含まれる。</p>	
	保育実習Ⅱ（保育所）	<p>保育所の保育を実際実践し、保育士として必要な資質・能力・技術を習得し、家庭と地域の生活実態にふれて、子ども家庭福祉ニーズに対する理解力、判断力を養うとともに、子育てを支援するために必要とされる能力を養う。授業全体の内容は、保育所の生活に参加し、乳幼児への理解を深めるとともに、保育所の機能と保育士の職務について学ぶ。授業終了時の達成課題は、保育の実際を理解することができる。また、保育士に求められる資質・技術及び今後の課題について説明できることとしたい。</p>	
	保育実習指導Ⅲ（施設）	<p>保育士資格を取得するためには、学内の関連科目の他、保育所実習および保育所以外の児童福祉施設の実習が必修となっている。実習に入る前に、福祉施設実習の意義と目的、福祉施設の機能と役割、実習日誌の書き方など、実習に関する具体的な技術、知識を学ぶ。また、実習後に実習体験の報告、討論、まとめを行い、実習日誌などの評価・指導を受ける。こうした学内の事前・事後指導の他に、実習園におけるオリエンテーション、さらには教員による巡回訪問指導も含まれる。</p>	

様式第2号(その3の1)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門 教育科目	保育実習Ⅲ(施設)	保育所以外の児童福祉施設，その他社会福祉施設の養護を実際に実践し，保育士として必要な資質・能力・技術を習得する。また，家庭と地域の生活実態にふれて，子ども家庭福祉ニーズに対する理解力，判断力を養うとともに，子育てを支援するために必要とされる能力を養う。保育実習Ⅰでの学びをもとに実習目的の明確化，および実習記録の書き方など，実習での具体的な取り組みの準備を行う。実習後は実習での評価，反省をもとに各自の学習課題の設定を行う。保育の実態を理解することが出来る。また，保育士に求められる資質・技能及び今後の課題について説明できることを目標とする。	
	教育実習(観察)	観察実習は，幼稚園教育の実態を理解することを目的とする実習である。実習形態としては，観察実習および参加実習とする。主として，子どもの生活と遊び，保育の流れ，保育者の役割等を観察する。また担任の先生の助手的立場にたち，その指示に従って保育に参加する。観察・参加したことは実習日誌に記録し，振り返ることを通して，今後の学習課題を発見する契機とする。具体的には，①一日の流れに沿った保育の理解(登園，遊び，昼食，降園の様子など)，②幼児理解)遊び，基本的生活習慣の自立，ことは，子ども・保育者・モノとのかかわり)，③幼稚園教諭の役割の理解(環境構成，幼児へのかかわり方，保護者との連携の方法など)，④幼児をめぐる人的・物的環境についての理解(クラス編成と園児数，教職員の構成と職務分担，施設・設備・遊具や敷地の状況など)，⑤実習園の教育方針等を理解する。	
	教育実習(本実習)	本実習は，観察実習での学習を踏まえ，学習した基礎理論および技能を実践的に検証することを目的とする。実習形態としては，参加実習および指導実習とする。参加実習では，担任の先生の助手的立場に立ち，その指示に従って保育に参加することでクラス一人ひとりの子どもに対する理解を深める。環境構成や援助行為にどのような意図があるのか理解し，幼稚園教諭の仕事にふれ，幼稚園教諭としてのあり方を体験を通して学ぶ。さらに，指導実習(部分実習・全日実習)では，実習生が自分で保育の内容や環境構成を計画し，指導計画を立案・実践することを通してより子ども理解を深め，環境構成や保育者の関わりなど保育実践の意図性を体験的に理解し，幼稚園教諭としての基礎的な知識・技能習得する。また，指導実習の経験から今後の課題を発見し，学びの契機とする。	
	教育実習指導	教育実習指導は，幼稚園における「教育実習」のための事前・事後指導である。事前指導では，教育実習(幼稚園)の意義・目的を理解する。実習の内容を理解し，自らの実習の課題(実習計画)を明確にする。実習の計画，実践，観察，記録，評価の内容や方法について具体的に理解し，実践に備える。また，実習に臨むにあたって必要とされる知識や技能，実習生として必要とされる心構えや態度等を学ぶ。これら事前学習をもとに，個々の学生が実習経験を“学び”として自己に蓄積することができる力を養う。事後指導では，各自の実習経験を振り返ることを通して，幼児，幼稚園教諭の役割，幼稚園の機能・役割の理解を深めるとともに，幼稚園教諭としての自己課題を発見し，解決できる力を培う。	

様式第2号(その3の1)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	子ども理解の方法Ⅰ	保育者は保育の対象となる子どもを理解することが重要である。そのためには、子どもの日常生活の様子や発達状態、仲間関係、保育者との関係、親子関係などを「観察」「記述」「分析」という次元の異なる方法によって把握する必要がある。子どもを「観察」「記述」するための方法は、参与観察、検査、量的調査、質的調査など様々なものがある。これらの方法について理論や事例を学ぶことにより、一人ひとりの子どもの内面や家庭的背景、養育環境などについて理解を深める方法を獲得する。	
	子ども理解の方法Ⅱ	保育者は、保育の対象である子どもを深く理解することが要求される。子ども理解のための方法には、「観察法」「検査法」「調査法」などがある。これらの手法を用いて、子どもの生活実態や集団の中での様子について観察や調査を行うことにより、実践的に手法を学ぶ。さらに、記録や結果の読み取りを通して、子どもの態度や行動の背景要因を探り、親と子ども、子ども同士など、子どもを取り巻く人間関係や社会経済的要因が育ちに与える影響について考察する力を身につけるとともに、観察や調査を行った結果についてのまとめ方、レポートの書き方、報告や発表の仕方などについても学ぶ。	
	保育・教職実践演習(幼稚園)	これまでに習得した保育者として必要な知識・技能に基づき、保育者としての使命感、責任感、教育愛を持って保育にあたることができるか振り返りをする。保育者の役割と職務内容、幼児理解と保育内容の指導、保育計画と実践、地域家庭支援などをテーマに、グループディスカッション、ロールプレイ等を実施して実践力が付いているかの確認をしていく。さらに模擬保育を実施して、保育者としての指導能力を自己点検・自己評価する。「教職実践ポートフォリオ・履修カルテ」も作成し、様々な場面で獲得した「教育実践力」を記録し、実践的指導力を育成してきた学びの航跡を確認する。自らの「教育実践力」を客観的に評価するためのデータファイルとして活用し、今後保育者として実践的に支援を行なうことができるように、新たな課題を見つけていく。	
	卒業研究指導Ⅰ	卒業研究は、3年次までに学習してきた授業や演習の集大成である。そのために、各自の問題意識や興味・関心に基づいて設定した研究テーマについて議論し追求し、まとめて発表の形にしていくための指導を行う。この授業では、個人だけでなく、共同研究も認め、各個人やグループのテーマ別の発表や全体討議、個人指導などを通して進める。具体的には、卒業研究についてのオリエンテーション、各自や各グループが検討したいことの紹介と大まかなテーマ設定、課題に取り組むための文献等の調査・収集、その紹介と討議、卒業研究のテーマや細目の決定などの指導を行う。 (1 牧野カツコ) 子どもと食生活、子どもと衣服、子どもの居場所、地域環境と子ども、祖父母と孫関係など、子どもの生活をテーマとして研究をしたい人を対象とする。自分の興味・関心の問題意識として高めること、どのように、卒業研究テーマとしてまとめていくかを学ぶ。	

様式第2号(その3の1)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	卒業研究	<p>(2 日吉佳代子) 保育に関することについて、自分の興味・関心から出発して、文献調査や文献収集をし、先行研究に学び、研究テーマを設定する。初めはゼミ形式で、グループ学習し、相互に学びあい情報を交換し合う授業にする。</p> <p>(3 北岡 晶) 子どもの生活の中から研究テーマを拾う時、限りなくそれは広がる。そのことをまず楽しむ。互いの研究テーマを知り、話しあうことによって子どもの生活に触れ、われわれ大人が見落としているものを補う。</p> <p>(4 駒場利男) 「イギリスの文化と歴史」 イギリスはヨーロッパ大陸の沖合に浮かぶ島国で、その面積は日本の65%程度、人口は日本の約半分ほどである。この小さなイギリスは、世界で初めて産業革命を達成し、19世紀には七つの海を支配する「日の没することのない帝国」と呼ばれた。この時代以降、イギリスのことばや文化は世界中に大きな影響を与えてきた。このイギリスのことば、文化、歴史などをテーマとして取り上げる。</p> <p>(5 加藤邦子) 各自関心を持っている事項について、自分の体験と結びつけて、問題提起を行なえるよう、研究の進め方を指導する。特に家族支援、乳幼児期の親子支援について関心を持っている学生に対して、問題設定ができるように指導する。</p> <p>(6 河田 隆) 乳幼児の体育遊びの分野において、学生が持っている問題意識や興味・関心に基づいて研究テーマを設定させ、そのテーマに合った研究方法について個別指導する。</p> <p>(7 間野百子) 受講生同士でこれまでの学習成果を学び合ったうえで、各自が最も主張したい論点について再検討する。同時に、効果的なプレゼンテーションの仕方、グループディスカッションの方法も視野に入れて、検討を進める。</p> <p>(8 和田佐英子) 町内会・自治会、子ども会、婦人会といった地縁型の地域集団とNPO等の市民活動団体の連携等による地域コミュニティ再生の問題を取り上げ、各自の視点で研究、発表できるよう指導していく。</p> <p>(9 中畝治子) 図画工作の授業で学習してきた様々な材料技法体験と造形表現に基づき保育現場での造形の展開を考える。保育者としてのオリジナルな作品制作を元に共同制作にも取り組む。またその中で、音楽や身体表現等と同時に展開することを踏まえた広がりのある造形活動まで発展させたい。</p> <p>(10 山口晶子) 本授業では、将来保育の現場で子どもたちへの指導を行うことを前提に、その現状を把握するとともに、望ましい指導のあり方について検討する。保育現場の見学、基本的文献の収集および講読、ディスカッションを通して、それぞれの興味に応じたテーマ設定を行う。</p>	

様式第2号(その3の1)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門 教育 科目	卒業 研究 卒業研究指導 I つづき	<p>(2) 高柳恭子) 研究テーマ設定に当たっては、保育に関することについて自分の興味・関心と地域社会での乳幼児にかかわる諸課題の両面から考える。課題の取り組むための文献調査・先行研究調査等については、学生相互に協同して進め、相互に学びあい情報を交換し合う授業にする。</p> <p>(11 蟹江教子) (1)子育て中の親の健康や育児不安、育児ストレスに関する分野、(2)子どもの養育環境に適したと社会経済的要因に関する分野、(3)保育者の労働環境や労働条件に関する分野、(4)結婚や出産に関する分野についての研究を行っていくための指導を行う。</p> <p>(12 月橋春美) 子どもから高齢者まで体育・スポーツやレクリエーションの分野において、学生が持っている問題意識に対して、その問題解決に向けてどのように研究を進めていったらよいかなど研究を行っていくに当たっての流れや、その方法論について個別に指導を行う。</p> <p>(13 土沢 薫) 子どもの発達（発達障害を含む）と心理的な問題および心理・教育的な援助が主な研究のテーマになる。まずは、自分としっかり向き合い、現場で子どもや子どもを取り巻く大人に出会い、仲間と対話しながら、自らの興味・関心を探り、高め、研究を続けていく知的“体力”を養う。与えられるのを待つだけでなく、自分らの栄養となる体験を見つけ出す直感力を磨き、それを手にするたくましさをも育てていく。</p> <p>(14 桂木奈巳) 「自然と人の暮らしのつながり」「自然と子どもの遊び」を主要なテーマとする。学生自身が興味を持つ事柄の発表・討議を行う。文献調査およびイベント（親子で自然に触れあう内容）参加・見学等の実体験から理解を深める。</p> <p>(15 石本真紀) 子ども家庭福祉に関する研究や、様々な理由により家庭での生活が困難な子ども達（社会的養護を必要とする子ども達）に対する研究を主なテーマとする。各自の問題関心の共有化をはかるため、文献輪読をおこなう。また、児童福祉施設等でのフィールドワークを行い、子どもや家族に対する支援の実際を学ぶ。</p> <p>(16 市川舞) 本授業では、子どもの生活の場（家庭、保育所、幼稚園など）における様々な課題について考えていきたい。基本的な文献を読み合い、問題意識をもちながら保育の現場に出向き、討議を行う。各人の研究テーマを決定し、個別に探究する手立てを探る。</p>	

様式第2号(その3の1)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	卒業研究指導Ⅱ	<p>Iに引き続き、各自の問題意識や興味・関心に基づいて設定した研究テーマについて議論し追求し、まとめて発表の形にしていくために指導を行う。この授業では、個人だけでなく、共同研究も認め、各個人やグループのテーマ別の発表や全体討議、個人指導などを通して進める。具体的には、卒業研究についてのオリエンテーション、各自や各グループが検討したいことの紹介と大まかなテーマ設定、課題に取り組むための文献等の調査・収集、その紹介と討議、卒業研究のテーマや細目の決定などの指導を行う。</p> <p>(1 牧野カツコ) 研究テーマをまとめるために適切なデータ収集の方法を決定し、実際に観察や調査等を行う。データ処理の方法、まとめ方、論文の書き方を具体的に学ぶ。ゼミ形式で、研究の経過を報告しあい、質疑、討議をしながら、論文にまとめていくよう指導する。</p> <p>(2 日吉佳代子) 関心を持った研究テーマについて、研究計画をたてて、調査や事例研究や保育の実践を通して研究を深める。</p> <p>(3 北岡 晶) 関心を持ったテーマをどのように調べ、深め、まとめていけばよいのか。先行研究を探索したり意見を交わしながら考えることの楽しさや難しさを知っていききたい。なぜなのだろう、どうなっているのだろう、どのようなかかわりかたがよいのだろうなど。</p> <p>(4 駒場利男) 「イギリスの文化と歴史」 イギリスはヨーロッパ大陸の沖合に浮かぶ島国で、その面積は日本の65%程度、人口は日本の約半分ほどである。この小さなイギリスは、世界で初めて産業革命を達成し、19世紀には七つの海を支配する「日の没することのない帝国」と呼ばれた。この時代以降、イギリスのことばや文化は世界中に大きな影響を与えてきた。このイギリスのことば、文化、歴史などをテーマとして取り上げる。</p> <p>(5 加藤邦子) 問題設定に基づき、目的を明確にできるように指導する。さらに目的を達成するためには、どのような方法論を用いればよいかについて検討することができるように、学生同士で先行研究を検索し、発表形式によってより深く検討する。</p> <p>(6 河田 隆) 乳幼児の体育遊びの分野において、設定されたテーマに基づいて先行研究や様々な調査方法について指導する。またその調査結果について考察の仕方を指導する。最後に各々の研究の結論をまとめさせる。</p> <p>(7 間野百子) Iで設定した各受講生または各グループの研究テーマを体系的に総括していく。各章、主要データ・資料の発表を通して、補うべき箇所などを指摘し合う。リライト箇所の再検討を繰り返しながら、研究論文の完成度を高めていく。</p> <p>(8 和田佐英子) Iに引き続き、各自が関心を強くもった地域集団を絞り込み、その地域集団によるコミュニティ再生の方策を検討させ研究させる。</p>	

様式第2号(その3の1)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門 教育 科目	卒業研究指導Ⅱつづき	<p>(9 中畝治子) 図画工作の授業で学習してきた様々な材料技法体験と造形表現に基づき保育現場での造形の展開を考える。保育者としてのオリジナルな作品制作を元に共同制作にも取り組む。またその中で、音楽や身体表現等と同時に展開することを踏まえた広がりのある造形活動まで発展させたい。</p> <p>(10 山口晶子) Iにおいて検討した研究テーマを確定し、ゼミにおける授業内発表を行う。また保育の年間計画の作成や、子どもたち一人一人の特性に応じた指導を行うために重要となる指導案や教材の選定、オリジナルな指導案や教材の創作を行う。</p> <p>(② 高柳恭子) 研究テーマに基づき研究計画を立てるにあたっては、調査や事例収集、保育実践、教材作成など実践的な研究方法を模索し、地域社会の乳幼児関係施設などの協力を得ながら、実際の研究としていく。</p> <p>(11 蟹江教子) 関心を持ったテーマにどのような方法でアプローチをするのが良いかについて考える。研究方法には、文献研究、量的調査、質的調査など様々な方法があるが、研究の目的と方法とがマッチしているかどうか、個々の研究に付いて指導を行う。必要に応じて分析ソフトの操作方法にも言及する。</p> <p>(12 月橋春美) 子どもから高齢者まで体育・スポーツやレクリエーションの分野において、設定されたテーマに基づく先行研究や様々な調査方法、さらには、考察の仕方などについて個別に指導を行う。また、明確な研究結果の示し方や発表方法についても指導を行う。</p> <p>(13 土沢 薫) 子どもの発達や心理的な問題に関連するテーマについて、理解や問題意識、研究計画について、ゼミのメンバー同士で発表し討論しながら進めていく。まずは、自分が関心を抱いている問題や対象を明確にしていく必要があり、なぜそのテーマに関心があるのか、その動機の部分を自らがしっかり意識していく。興味のあるテーマを見つけ、先行研究を読み進める中で、まだ解明されていない点や、詳細にみる必要がある点などを発見し、それぞれのテーマを深めていく。</p> <p>(14 桂木奈巳) Iに記載したテーマに関する文献調査およびイベント(親子または子どもとともに自然に触れ合う内容)の企画、実施等を行い、その経験から人と自然とのつながりについて考える。最終的には研究テーマの設定を行う。</p>	

様式第2号(その3の1)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門 教育 科目	卒業研究指導Ⅱつづき	<p>(15 石本真紀) Iに引き続き、フィールドワークを通して、子どもたちがいきいきと自分らしく生活していくためにはどのような支援が必要なのかを考えながら、子どもや家族に対する支援の実際について学ぶ。また、各自が関心を持つテーマについて議論を深めていく。研究発表を行いながら、自らの研究テーマを設定し、卒業研究のための準備を進めていく。</p> <p>(16 市川舞) 卒業研究指導Ⅰを受け、各人の研究テーマに基づき、先行研究の検討、調査・分析・検討を行い、報告書にまとめる方法を具体的に学ぶ。個別での作業のみならず、授業内で中間発表を行い、プレゼンテーション力を養う。</p>	
	卒業研究	<p>卒業研究は、3年次までに学習してきた授業や演習の集大成である。そのために、各自の問題意識や興味・関心に基づいて設定した研究テーマについて議論し追求し、まとめて発表の形にしていく。これまでに学んだ知識だけでなく、一年間をかけて自ら問題を設定し、探求していく姿勢や方法についても学んでいく。卒業研究指導教員の指導を受けながら、主体的に研究を進めさせる。各自の研究の成果については、合同の発表の場を設け、意見交換などをして、相互に理解を深めさせたい。</p> <p>(1 牧野カツコ) 論文として、一人100頁以上のものを完成させる。論文の目的、方法、結果、まとめと考察などの体裁を学び、論文の文章の書き方を学ぶ。研究成果は、パワーポイントやプリント資料を用いて、適切な発表ができるようにする。</p> <p>(2 日吉佳代子) 保育思想、保育の歴史、保育方法、保育者論等について興味関心のある研究を行う。自分の保育に関する得意な部分を身につけて、保育者として育つことを期待している。</p> <p>(3 北岡 晶) 心理学研究、福祉援助論(児童、障害者など)、教育方法論(体育、芸術関係は除く)などの視点からの指導となる。予想されるテーマは「遊び」「絵本・童話」「親子」「子どもの日常生活行動・意識」「気になるこども」「幼稚園・保育園・施設での生活」等である。</p> <p>(4 駒場利男) 「イギリスの文化と歴史」 イギリスはヨーロッパ大陸の沖合に浮かぶ島国で、その面積は日本の65%程度、人口は日本の約半分ほどである。この小さなイギリスは、世界で初めて産業革命を達成し、19世紀には七つの海を支配する「日の没することのない帝国」と呼ばれた。この時代以降、イギリスのことばや文化は世界中に大きな影響を与えてきた。このイギリスのことば、文化、歴史などをテーマとして取り上げる。</p>	

様式第2号(その3の1)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門 教育 科目	卒業研究つづき	<p>(5 加藤邦子) 各自の問題設定に基づき、目的を明確化し、先行研究を参考にすることによって、適切な方法論を選択する。各自の選択した方法論に基づきデータを収集し、目的に合わせた結果が得られるように指導する。求められた結果について、研究のまとめ方を指導し発表につなげられるようにする。</p> <p>(6 河田 隆) 乳幼児の体育遊び分野において、各々の設定テーマに基づいて研究し、まとめ上げた成果を、発表の機会を設け、各々の方法で、発表させる。発表後は、発表者同士で意見交換等を行い、お互い評価し合う。</p> <p>(7 間野百子) 前半では、卒業論文の執筆に向けての基礎を固めるために、論理的文章の書き方、章構成の立て方、先行研究の分析手法なども含めて検討する。後半からは、各受講生の進展状況に即して、原案の報告・検討、推敲を重ねながら、論文の完成に導いていく。</p> <p>(8 和田佐英子) 都市コミュニティにおける地域集団の中で、各自が特に興味を持った地域集団を中心にコミュニティ再生のあり方を研究し、それを発表させ、相互の理解を深める。</p> <p>(9 中畝治子) グループで音楽や身体表現と同時に展開する造形活動を研究し、一つの形にして発表する。グループ相互に意見を出し合い、より良いものに発展させる。</p> <p>(10 山口晶子) 卒業研究においては、研究発表とあわせて、卒業後に臨む現場での指導を前提とした保育内容の発表を行う。それらの発表は企画・運営ともに学生自らがを行い、それらの経験を通して子どもたちの生きる力を育むことのできる保育者となることを目指す。</p> <p>(2) 高柳恭子 乳幼児の発達や心理、保育内容と教育課程、保育方法、保育者論等について興味・関心のある研究を行う。自分の得意分野を見出すと共に、生涯にわたって研究し続け資質向上に努める保育者となることを目指す。</p> <p>(11 蟹江教子) 卒業研究では、研究論文の体裁や書き方を学び、実際に研究論文を執筆する。合同発表会では、パワーポイント等を利用して研究内容を第三者にわかりやすく説明できるようにするとともに、議論を深める。また、プレゼンテーションのための技術についても学ぶ。</p> <p>(12 月橋春美) 子どもから高齢者まで体育・スポーツやレクリエーションの分野において、学生が設定したテーマをもとに、具体的な対象者や研究方法に対して指導を行い、発表の機会を設ける。また、その後も問題意識を常に持ち、継続して研究活動を行っていきけるような人材を育成する。</p>	

様式第2号(その3の1)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門 教育 科目	卒業研究つづき	<p>(13 土沢 薫) 子どもの発達（発達障害を含む）と心理・教育的援助にかかわるテーマから、それぞれが興味関心のあるテーマにそって、必要な研究計画を立て、調査や実験・観察などを通して、疑問や問題を解明していく。子どもの発達に関連する問題は広範囲にわたっているため、量的研究だけでなく質的研究も重要になる。外に出て、人々に出会い、子どもや社会を観察する機会をもちながら、現場の熱意や思考様式に刺激を受けつつ、実践的研究を行っていく。</p> <p>(14 桂木奈巳) 設定したテーマに関連する文献調査やアンケート実施等を行う。文献の読み方やアンケート調査のデータ分析等を指導し、論文形式に研究成果をまとめる。その過程で発表会を実施し、他学生との意見交換等を通し、自らのテーマの理解をさらに深める。</p> <p>(15 石本真紀) 子ども家庭福祉に関する研究や、社会的養護を必要とする子どもたちに対する研究についてのこれまでの学びを、個人あるいは共同研究という形で論文にまとめていく。これまでおこなってきたフィールドワーク、卒業研究指導での学びから研究テーマを設定し、最終的には、卒業論文報告会を行い、意見交換を行う。また、各自が取り組んだ卒業研究の要約を卒業論文集としてまとめていく。</p> <p>(16 市川舞) 卒業研究指導ⅠⅡを受け、各自の研究テーマについて、先行研究の検討、調査・分析を行い、報告書にまとめる。また、合同発表を行うことから、今後のさらなる課題を発見する。このプロセスを通じて、「自ら学び続ける保育者」としての素養を養う。</p>	